

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (Linux 版)**

バージョン 4.4

**WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus**



**WebSphere Business Integration Server
Express インストール・ガイド (Linux 版)**

バージョン 4.4

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、83 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4 に適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： WebSphere Business Integration Server
Express and Express Plus
WebSphere Business Integration Server
Express Installation Guide for Linux
Version 4.4

発 行： 日本アイ・ビー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2005.5

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W7、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2004, 2005. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2005

目次

本書について	v
対象読者	v
関連文書	v
表記上の規則	v
本リリースの新機能	vii
リリース 4.4 の新機能	vii
リリース 4.3.1 の新機能	vii
リリース 4.3 の新機能	vii
第 1 章 インストールの概要	1
次のステップに進む	2
第 2 章 Launchpad の始動	3
始動前の準備	3
Launchpad の起動	4
次のステップに進む	6
第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール	7
インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)	9
「標準」インストール	10
「カスタム」インストール	17
ソフトウェア前提条件	20
First Steps の使用	23
ディレクトリー構造およびファイル	25
初期インストール後の追加コンポーネントのインストール	27
GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール	27
次のステップに進む	28
第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理	29
WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動	29
InterChange Server Express のセットアップ	30
次のステップに進む	32
第 5 章 インストールの検証	35
Quick Validate	35
次のステップに進む	35
第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール	37
GUI による Adapter Capacity Pack のインストール	37
GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール	40
次のステップに進む	40
第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール	41
GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール	41
GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール	44

次のステップに進む	45
第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成	47
Web ベース・ツールについて	48
WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成	48
Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成	51
次のステップに進む	53
第 9 章 システムのアップグレード	55
サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項	55
既存のユーザー・プロジェクトの保存	56
前提条件ソフトウェアのアップグレード	58
既存のシステムの準備	59
WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード	62
WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード	65
WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード	68
新規のアップグレード・バージョンの始動	76
アップグレードの検証	77
アップグレード・バージョンのテスト	77
アップグレード・バージョンのバックアップ	77
次のステップに進む	78
付録. サイレント・インストールおよびアンインストール	79
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール	79
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール	80
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール	80
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール	81
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール	81
Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール	81
特記事項	83
プログラミング・インターフェース情報	84
商標	85
索引	87

本書について

IBM(R) WebSphere(R) Business Integration Server Express 製品および IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品は、InterChange Server Express、CollaborationFoundation、および一連のソフトウェア統合アダプターで構成されています。プリパッケージされている各種アダプターは、お客様の複数アプリケーションにまたがるビジネス・プロセスに応じて、いずれかを選べるようになっています。標準的な処理のテンプレートである CollaborationFoundation は、カスタマイズされたプロセスを簡単に作成できるようにするためのものです。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express システムおよび IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus システムのインストール方法とセットアップ方法について説明します。

特に明記されていない限り、本書の情報は、いずれも、IBM WebSphere Business Integration Server Express と IBM WebSphere Business Integration Server Express Plus の両方に当てはまります。WebSphere Business Integration Server Express という用語と、これを言い換えた用語は、これらの 2 つの製品の両方を指します。

対象読者

本書は、Linux(TM) 環境で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、配置、および管理を担当するコンサルタントやシステム管理者を対象としています。

関連文書

本書の対象製品の一連の関連文書には、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のどのインストールにも共通する機能とコンポーネントの解説のほか、特定のコンポーネントに関する参考資料が含まれています。

関連文書は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

注: 本書の発行後に公開されたテクニカル・サポートの技術情報や速報に、本書の対象製品に関する重要な情報が記載されている場合があります。これらの技術情報や速報は、WebSphere Business Integration のサポート Web サイト (<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support/>) で参照できます。適切なコンポーネント領域を選択し、「Technotes (技術情報)」セクションと「Flashes (速報)」セクションを参照してください。

表記上の規則

本書は、下記の規則に従って編集されています。

`courier font`

コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、リテラル値を示します。

太字	初出語を示します。
イタリック	変数名または相互参照を示します。PDF ファイルを表示した場合、相互参照は青色のイタリック体で表示されます。相互参照を選択すると、目的の情報にジャンプできます。
<i>italic courier</i>	入出力情報などのリテラル・テキストの中の変数名を示します。
枠付きの courier	コード・フラグメントをその他の本文と区別します。
青のアウトライン	オンラインで表示したときのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側を選択すると、参照先オブジェクトにジャンプします。
{ }	構文の記述行の場合、中括弧 { } で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、 <code>option[,...]</code> は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
¥	本書では、ディレクトリー・パスの区切り記号の規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX(R) システムの場合には、円記号 (¥) をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての IBM WebSphere Business Integration Server Express のパス名は、ご使用のシステムにおいてこの製品がインストールされているディレクトリーを基準とした相対パスです。
<i>ProductDir</i>	製品のインストール先ディレクトリーを表します。

本リリースの新機能

リリース 4.4 の新機能

このリリースでは、インストールにおいて以下の変更が加えられており、これらが本書に反映されています。

- 「カスタム」および「標準」のインストール・オプション
- First Steps アプリケーションのインストール
- 「Quick Start」は「Quick Validate」と呼ばれるようになり、First Steps からの組み込みオンライン文書でサポートされるようになりました。
- Web Deployment アプリケーションのインストール
- 役割ベースのアクセス制御、およびユーザーが定義可能なユーザー名およびパスワード

リリース 4.3.1 の新機能

このリリースでは、以下のオペレーティング・システムに対する実動モードのサポートを追加しています。

- IBM OS/400 V5R2、V5R3
- Red Hat Enterprise Linux(TM) AS 3.0 (Update 1 を適用)
- SuSE Linux Enterprise Server 8.1 SP3
- Microsoft Windows 2003

リリース 4.3 の新機能

本書の最初のリリースです。

第 1 章 インストールの概要

IBM WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 製品には、Launchpad と呼ばれるグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) ベースのセットアップ・プログラムが組み込まれています。Launchpad は、前提条件ソフトウェアと製品ソフトウェアのインストールおよび構成の方法をステップバイステップに示します。

Launchpad を使用すると、デフォルトのコンポーネント一式を自動的にインストールする「標準」インストールか、またはインストールするコンポーネントを選択できる「カスタム」インストールを実行できます。いずれの場合も、Launchpad は、システムにその他の必要な前提条件ソフトウェアがすでにインストールされているかどうかを検出し、この情報を表示します。前提条件ソフトウェアがインストールされると、Launchpad は、インストールが完了するまで引き続き手順を示します。

本書では、IBM WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を動作させるために必要な、インストールや初期構成のプロセスの各手順について詳細に説明します。主な手順は次のとおりです。

1. この製品をインストールする予定のシステムが、ハードウェア要件およびソフトウェア要件を満たしていることを確認します。固有の要件については、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。
2. Launchpad を始動し、そこから製品のインストールを開始します。(2 章)
3. 「標準」インストールと「カスタム」インストールのどちらにするかを決定します。標準インストールとカスタム・インストールの違いについては、3 章を参照してください。Launchpad により、サポートされている前提条件ソフトウェアが検査されます。サポートされている前提条件ソフトウェアのリストについては <http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。次に、残りの Launchpad インストール・プロセスに進みます。(3 章)
4. 追加の構成ステップを実行します。(3 章)
5. システムを始動し、First Steps を使用するか Linux コマンドと System Manager を使用して、初期管理を行います。(4 章)
6. (オプションですが実行を推奨します。) First Steps 内にある「Quick Validate」プロシージャを使用して、システムがインストールされ、正しく動作していることを確認します。(5 章)
7. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみのオプション) Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターをインストールします。(6 章)
8. (WebSphere Business Integration Server Express Plus の場合のみのオプション) Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールします。(7 章)

本書のその他の章では、以下について説明します。

- 47 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』
- 55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』

- 79 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』

次のステップに進む

インストールおよび構成のプロセスを開始するには、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』に進んで、Launchpad の基本機能を学習します。

第 2 章 Launchpad の始動

Launchpad GUI を使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールおよび構成を順を追って行うには、基本的な機能を習得する必要があります。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『始動前の準備』
- 4 ページの『Launchpad の起動』
- 6 ページの『次のステップに進む』

始動前の準備

Launchpad を始動する前に、以下の作業を行います。

- ご使用のシステムが、Web サイト <http://www.ibm.com/software/integration/wbserverexpress> にリストされたハードウェア要件を満たしていることを確認します。

注: このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

- 次の指示に従って、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のユーザーを作成します。
 1. Linux システムに root ユーザーとしてログインします。
 2. 次のコマンドを実行してユーザーを作成し、そのユーザーのパスワードを設定します。

```
/user/sbin/useradd -d HomeDirectory -g InitialGroup -G OtherGroups -m user_name -p user_password
```
- 製品に有効なフィックスパックがあるかどうかを、次のサイトで確認します。<http://www.ibm.com/software/integration/websphere/support>
- 製品をインストールするマシンでの root ユーザー特権を持っていることを確認します。この要件が満たされない場合は、この問題を示すエラー・メッセージが表示され、Launchpad プログラムは強制終了します。
- 本書におけるインストールの指示は、製品 CD からのインストールを想定しています。パスポート・アドバンテージによって取得した ESD からインストールする場合は、以下の作業を行います。
 - ダウンロード手順については、使用するパスポート・アドバンテージの情報を参照してください。
 - 適切なインストーラー機能を保証するため、すべての ESD をファイル・システム上の同一ディレクトリーに抽出して、マシンからインストールします。ESD イメージを基にして CD を作成して、その CD からインストールするようなことはしないでください。そのようにした場合、一部のソフトウェア前提条件の構成ユーティリティーは、実際的前提条件ソフトウェアが含まれている ESD にパッケージされないため、インストールに失敗する可能性があります。

- ファイルを `untar` するユーザーは、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールするユーザーと同じユーザーになるようにします。これらの作業を別のユーザーが実行すると、製品のインストーラーは正しく動作しません。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストーラーで、System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment のいずれかの機能をインストールして、Express または Express Plus 製品、および WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server と共に使用する場合は、次のいずれかを行う必要があります。
 - 本書に記載されている手順で、Launchpad の「ソフトウェア前提条件」画面から IBM WebSphere Application Server Express バージョン 6 のインストールを選択する。
 - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストーラーを実行する前に、サポートされるバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server の 1 つをあらかじめインストールしておく。

そうしないと、47 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』で説明するように、System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment を手動で構成することが必要になります。

サポートされるバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server については、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。58 ページの『前提条件ソフトウェアのアップグレード』も参照してください。

- 新規データベースの作成および新規ユーザーの追加を行うための管理者特権があることを確認します。

Launchpad の起動

Launchpad を起動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の基本コンポーネントが収録された CD をコンピューターに挿入します。

Launchpad を起動するには、以下の作業を行います。

1. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の基本コンポーネントが収録されている CD をコンピューターに挿入します。
2. CD-ROM ドライブを次のようにマウントします。
 - Red Hat Linux システム
`mount /dev/cdrom /mnt/cdrom`
 - SuSE Linux システム
`mount /dev/cdrom /media/cdrom`
3. 次のコマンドを実行して、Launchpad を始動します。
 - Red Hat Linux システム
`/mnt/cdrom/start_launchpad.sh`

- SuSE Linux システム
/media/cdrom/start_launchpad.sh

Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。

要確認: これ以降、本書では、*mount_point* という用語を使用して、Red Hat Linux システムのパス */mnt/cdrom*、または SuSE Linux システムのパス */media/cdrom* を表します。

Launchpad の「ようこそ」画面が表示されます。「ようこそ」画面の左側のボタンを使用すれば、いくつかのタスクを即時に選択できます。

WebSphere Business Integration Server Express 製品の Launchpad の「ようこそ」画面は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品とは少し異なります。

図 1 は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品の Launchpad の「ようこそ」画面の例です。Express Plus バージョンには、「**Capacity Pack のインストール**」というボタンがある点に注目してください (Express バージョンにはありません)。このボタンにより、Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack のインストーラーを起動できます。Adapter Capacity Pack と Collaboration Capacity Pack のインストール手順については、37 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』および 41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』の説明を参照してください。



図 1. WebSphere Business Integration Server Express Plus Launchpad の「ようこそ」画面

「ようこそ」画面のボタンによって制御されるタスクは、次のとおりです。

製品のインストール

インストールする製品コンポーネントに基づいて、適切なソフトウェア前提条件をインストールするようユーザーをガイドし、さらに製品コンポーネントもインストールします。

Capacity Pack のインストール

(WebSphere Business Integration Express Plus のみ。) 基本製品では入手できないコラボレーションや追加アダプターのインストールを可能にします。

インストール・ガイド (Install Guide)

WebSphere Business Integration Server Express Information Center に導く Web ページにリンクします。Information Center では、このインストール・ガイドを含むすべての製品資料を入手できます。

最初のステップ

First Steps アプリケーションを起動します。First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、インストールの完了後は、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。

終了 Launchpad を終了します。

次のステップに進む

この章で概説されている Launchpad GUI の基本操作の実行に問題がない場合は、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に進み、必要な前提条件ソフトウェアの確認、選択された前提条件ソフトウェアのインストール、および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールを実行するために Launchpad を使用方法についての説明を参照してください。

第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムは、インストールする予定のコンポーネントに基づいて、インストールに必要な前提条件ソフトウェアを決定します。特定の項目がインストールされていない場合は、それらの項目をインストールできます。

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus for Linux のほとんどのコンポーネントは、Linux ベースのシステムにインストールされます。ただし、Toolset Express の非 Web ベース・コンポーネントには、WebSphere Business Integration Express サーバーを管理する必要があるソフトウェア・ツールが含まれており、これらのコンポーネントは Windows クライアントにインストールしなければなりません。Toolset Express には、以下のツールが含まれます。

- 管理ツール: Flow Manager、Log Viewer、Relationship Manager、System Manager
- 開発ツール: Business Object Designer Express、Connector Configurator Express、統合テスト環境、Map Designer Express、Process Designer Express (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールでのみ有効)、Relationship Designer Express、IBM Eclipse SDK 3.01 (IES 3.01)

このマニュアルの残りの部分では、Linux システムにインストールされるコンポーネントについて説明します。Toolset Express のインストールについての詳細は、「*WebSphere Business Integration Server Express* システム・インストール・ガイド (Windows 版)」を参照してください。

Launchpad には、「標準」と「カスタム」の 2 種類のインストール・オプションが用意されています。

「標準」インストールでは、以下のコンポーネントが Linux システムに自動的にインストールされます。

- InterChange Server Express
- JText Adapter
- サンプル

「標準」インストールでは、必要な前提条件コンポーネントがあることとその大半をインストールできるかどうか自動的に検出されます。

「カスタム」インストールでは、インストールするコンポーネントを選択できます。「標準」インストールの場合と同様に、前提条件のコンポーネントがインストールされていることとそれらをインストールできるかどうか検出されます。選択可能なコンポーネントの詳細は、9 ページの『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』のセクションを参照してください。「カスタム」インストールの詳細は、17 ページの『「カスタム」インストール』のセクションを参照してください。

「標準」インストール・オプションの詳細は、10 ページの『「標準」インストール』のセクションを参照してください。

インストールの説明では、この章全体を通して以下の事項を前提にしています。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 は、まだマシンにインストールされていない。以前のバージョンの製品または Capacity Pack がインストールされていて、これらをバージョン 4.4 にアップグレードする場合や、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 がインストールされていて、これを WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、手順について 55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。
- コンポーネントは、サポートされる Linux バージョンが実稼働環境で稼働しているマシン上にインストールされます。Linux の各バージョンでサポートされている製品コンポーネントのリストについては、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。
- Linux プラットフォームではサポートされないが、InterChange Server Express の管理に必要となるコンポーネントは、リモートの Windows マシン上にインストールされ、到達可能になります。これを行うには、「WebSphere Business Integration Server Express システム・インストール・ガイド (Windows 版)」のインストールおよび構成の手順に従います。
- インストールは、WebSphere Business Integration Server Express Plus システムに関するものです。WebSphere Business Integration Server Express システムをインストールする場合は、表示される画面が少し異なります。
- 読者は、3 ページの『第 2 章 Launchpad の始動』の情報を読んで理解し、Launchpad を起動済みであるとしめます。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 9 ページの『インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)』
- 10 ページの『「標準」インストール』
- 17 ページの『「カスタム」インストール』
- 20 ページの『ソフトウェア前提条件』
- 23 ページの『First Steps の使用』
- 25 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』
- 27 ページの『初期インストール後の追加コンポーネントのインストール』
- 27 ページの『GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール』
- 28 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、79 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

インストールするコンポーネントの決定 (「カスタム」インストールのみ)

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus を「カスタム」インストールを使用してインストールするときは、製品コンポーネントの全部または一部のサブセットをインストールできます。インストール可能なコンポーネントは、Launchpad の「セットアップ・タイプを選択してください」画面の「カスタム」ボタンを選択するときに表示される画面、またはサイレント・インストール時に使用される応答ファイル内のいずれかから選択できます。

注: 前述したように、「標準」インストールでは、インストール対象のコンポーネントが Launchpad によって自動的に検出されます。

サポートされるすべての Linux バージョンにおいて、インストールで選択可能なコンポーネントはまったく同じです。

次のセクションでは、Linux システムで選択できる、インストール可能コンポーネントについて説明します。

InterChange Server Express およびコンポーネントの詳細については「システム管理ガイド」、アダプターの詳細については個々のアダプター・ガイドを参照してください。すべての文書は、Web サイト

<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> で参照できます。

Linux システムでのインストールに使用できるコンポーネント

Linux システムへのインストール時に、以下のコンポーネントのセットから選択できます。

- InterChange Server Express コンポーネント

InterChange Server Express と共に、次のツールもインストールされます。

- System Monitor
- Failed Event Manager
- Web Deployment
- 次のリストから選択したアダプター
 - Adapter for e-Mail
 - Adapter for Healthcare Data Protocols
 - Adapter for HTTP
 - Adapter for iSeries
 - Adapter for JDBC
 - Adapter for JMS
 - Adapter for JText
 - Adapter for Lotus Domino
 - Adapter for SWIFT
 - Adapter for TCP/IP
 - Adapter for Web Services
 - Adapter for WebSphere Commerce

- Adapter for WebSphere MQ
- Adapter for XML

注:

1. 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それらのアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれのアダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。
 - Data Handler for EDI
 - Data Handler for XML
 2. Adapter for COM および Adapter for Exchange は、Windows 2003 プラットフォームでのみサポートされます。ただし、これらの各アダプターは、Linux プラットフォームにインストールされた InterChange Server Express と通信する分散アダプターとして構成できます。分散アダプターの構成については、「システム・インプリメンテーション・ガイド」を参照してください。
- サンプル・コンポーネントは、System Test と呼ばれる構成済みのサンプルをインストールします。この System Test を実行すれば、インストールが正しく行われ、正常に動作するかを検証できます。

「標準」インストール

「標準」インストールを開始するには、以下の手順に従います。

1. 「ようこそ」画面で、「製品のインストール」を選択します。

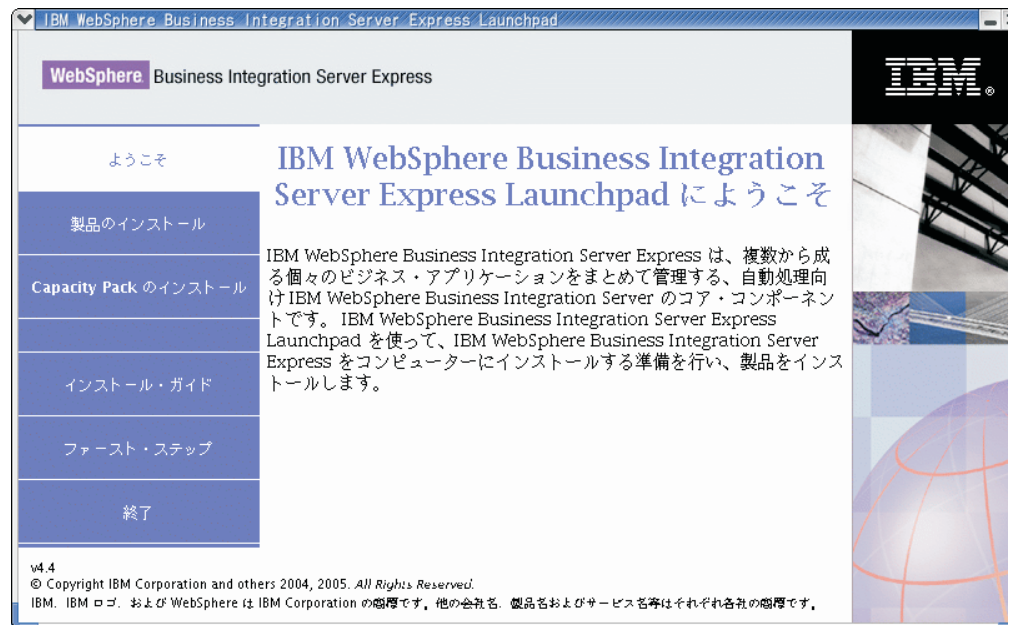


図2. 「ようこそ」画面

「入力ユーザー」画面が表示されます。

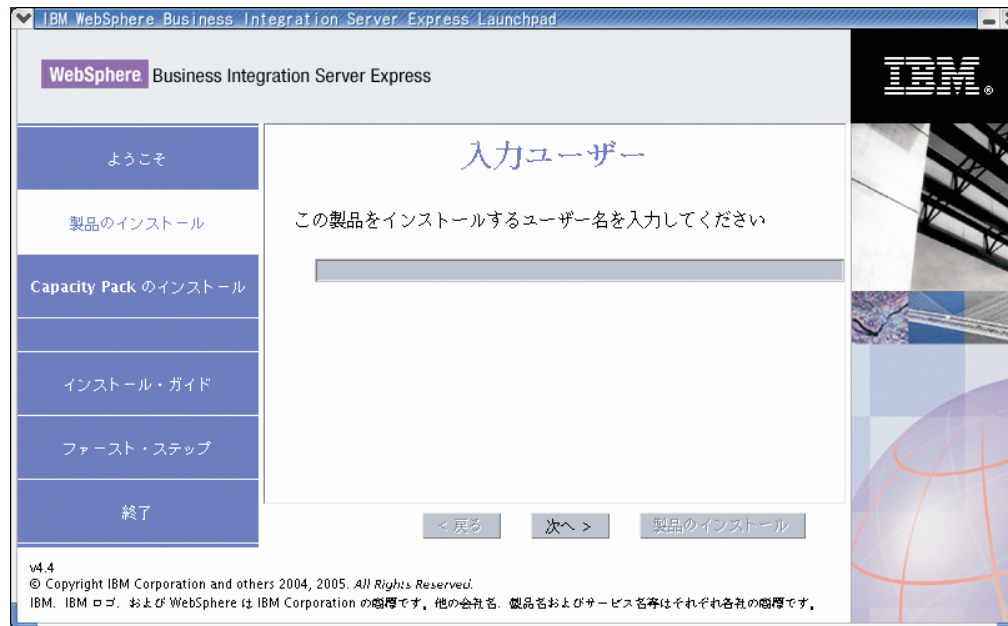


図3. 「入力ユーザー」画面

2. WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールするユーザーの名前（3 ページの『始動前の準備』の手順に従って作成したユーザー名）を入力して、「次へ」を選択します。

「セットアップ・タイプを選択してください」画面が表示されます。

3. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面で、「標準」を選択します。



図4. 「セットアップ・タイプを選択してください」画面

「標準」インストールを選択すると、「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

注: IBM WebSphere Application Server - Express バージョン 5.1.1 以上はオプションですが、サポートされるバージョンの WebSphere Application Server Express または WebSphere Application Server をまだインストールしておらず、System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment を使用する場合は、「ソフトウェア前提条件」画面から、IBM WebSphere Application Server - Express バージョン 6 のインストールを選択する必要があります。

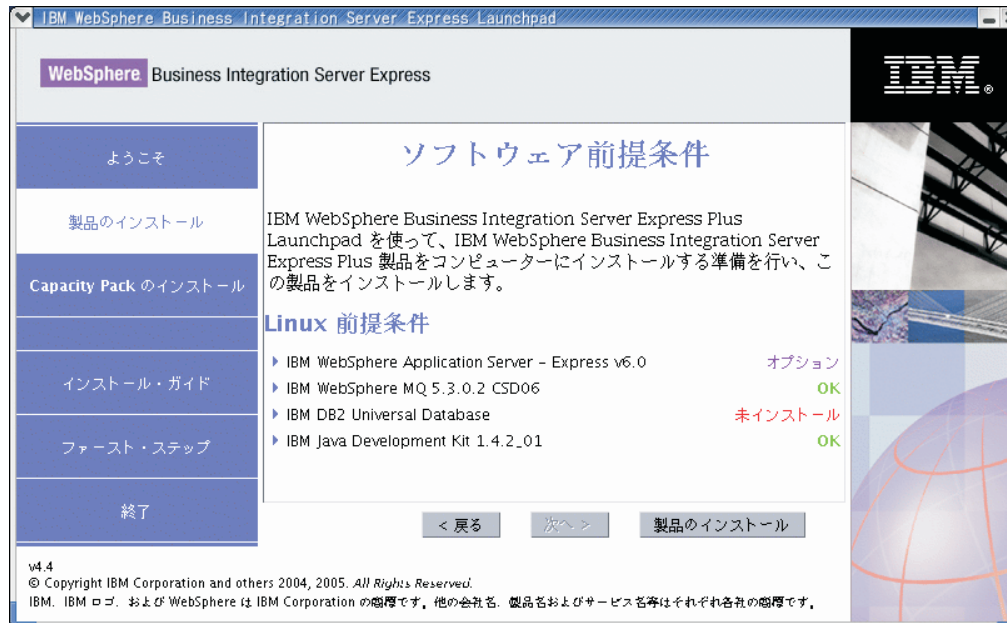


図 5. 選択された前提条件をインストールする前の「ソフトウェア前提条件」画面

4. Launchpad には、各前提条件のインストール状況が表示されます。状況値としては、「未インストール」、「オプション」、または「OK」があります。また、データベース選択に関してのみ、「未構成」があります。

システムに必要なソフトウェア・プログラムの状況が「未インストール」または「オプション」である場合は、Launchpad を使用して、対象のソフトウェアをインストールするか、または入手先を通知することができます。

Launchpad を使用してソフトウェア・プログラムをインストールするには、製品名をクリックします。「インストール」ボタンが表示されます。「インストール」ボタンを選択して、プログラムのインストールを開始します。ソフトウェア・プログラムのインストール・プロセスが完了すると、「ソフトウェア前提条件」画面に戻り、プログラム名の横に「OK」が表示されます。

データベースがインストール済みで、その状況が「未構成」の場合は、Launchpad を使用してデータベースを構成できます。データベース名をクリックして、構成を開始します。

注: このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンがすでにインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。

特定の前提条件ソフトウェアをインストールする必要がある理由など、前提条件ソフトウェアのインストールの詳細は、20 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。

予定しているインストールに必要な前提条件ソフトウェアの状況が「OK」になったら、画面の下部にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

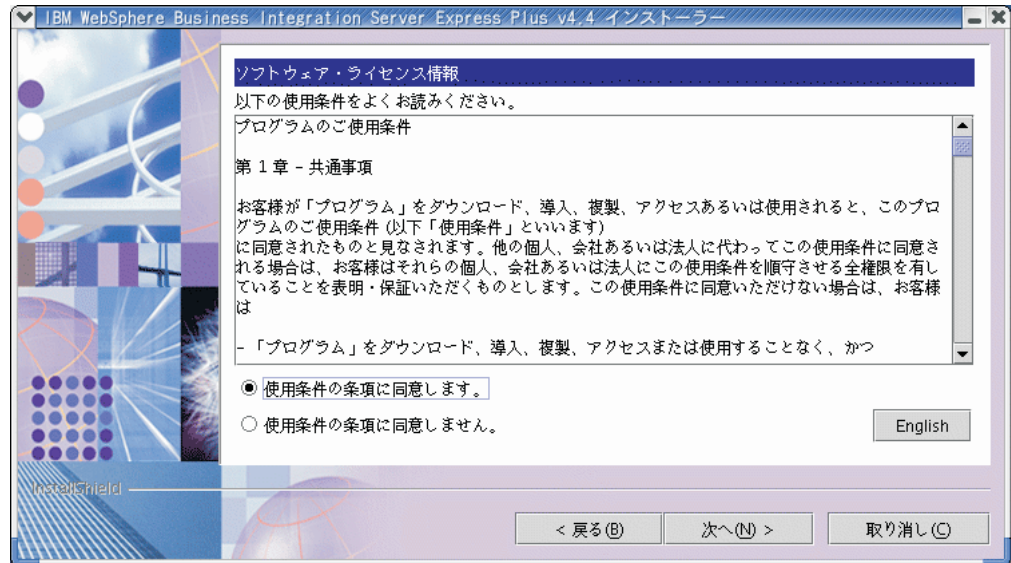


図 6. 「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面

5. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

注: 英語以外のロケールでインストーラーを実行している場合は、「英語」というラベルのボタンが「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面に表示されます。ソフトウェアご使用条件を英語で表示するには、このボタンを選択します。このボタンを選択すると、ボタンのテキストは、インストーラーに使用されていた英語以外の言語に変更されます。ソフトウェアご使用条件を、インストーラーに使用されている英語以外の言語で表示するには、このボタンをもう一度選択します。

「宛先」画面が表示されます。

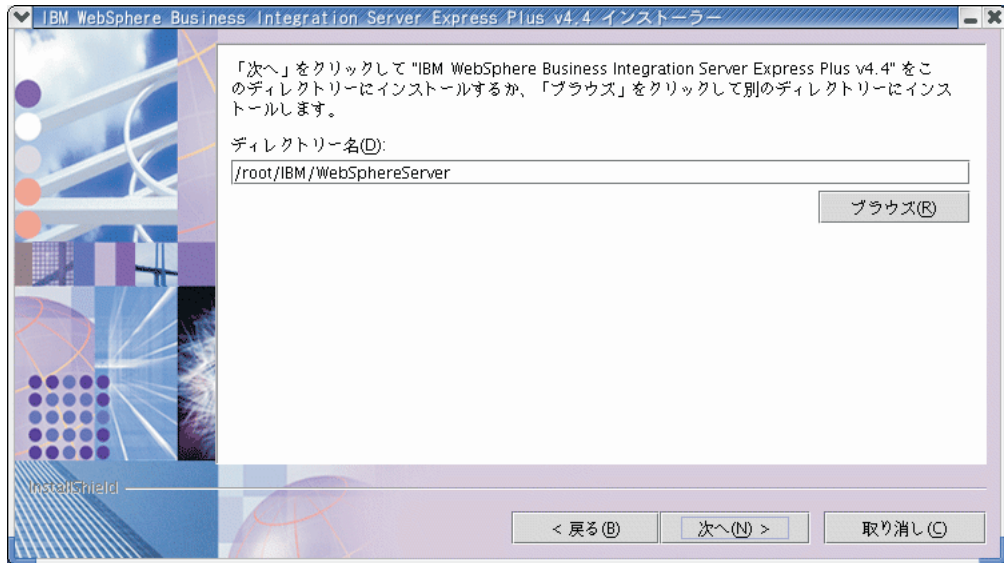


図7. 「宛先」画面

6. 「宛先」画面で、デフォルトのインストール・ロケーション

Home_directory/IBM/WebSphereServer (Home_directory は、前の「ユーザーの選択」画面で識別されたユーザーのホーム・ディレクトリー) を受け入れるか、別のロケーションをブラウズして、「次へ」を選択します。

注: ディレクトリー・パスの中にスペースが入らないようにしてください。本書では、インストール・ディレクトリー Home_directory/IBM/WebSphereServer (または、入力した代替パス) のことを *ProductDir* と呼びます。

「RBAC」画面が表示されます。

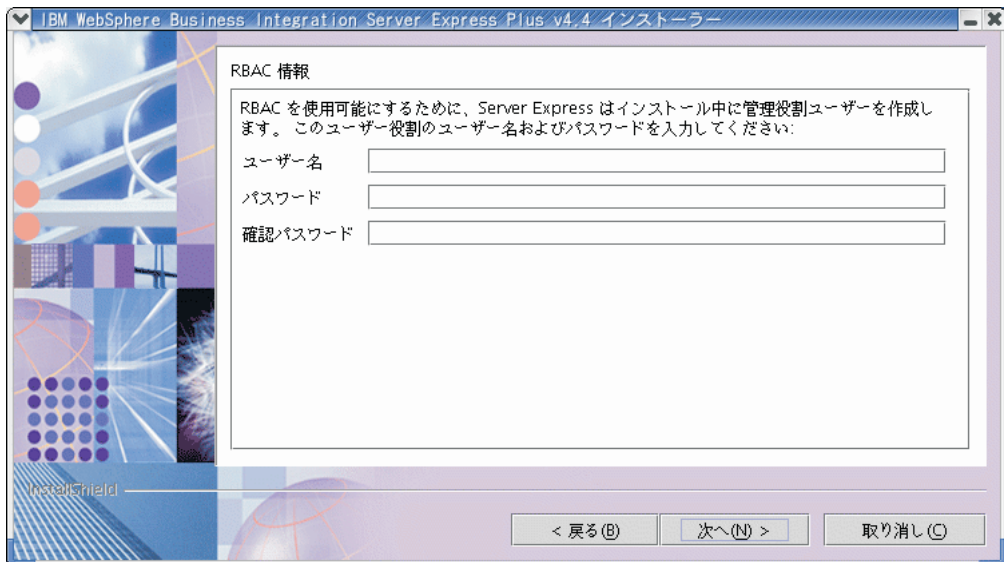


図8. 「RBAC」画面

7. Role-Based Access Control (RBAC) を使用可能にするには、「ユーザー名」と「パスワード」を入力して、「次へ」を選択します。

次のいずれかの処理が実行されます。

- 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
- 前提条件が満たされると、「要約」画面が表示されます。

入力したユーザー名とパスワードのメモを取っておいてください。後で必要になります。

注: RBAC には、サーバー・アクセスのセキュリティーを向上する機能があります。入力したユーザー名とパスワードは、サーバーへの配置時にサーバー管理者の役割を作成するときに使用します。この情報は InterChangeSystem.cfg ファイルに格納されます。その際、パスワードは暗号化されます。RBAC に関する役割の追加やパスワードの変更がある場合は、後で System Manager を使用して実行する必要があります。

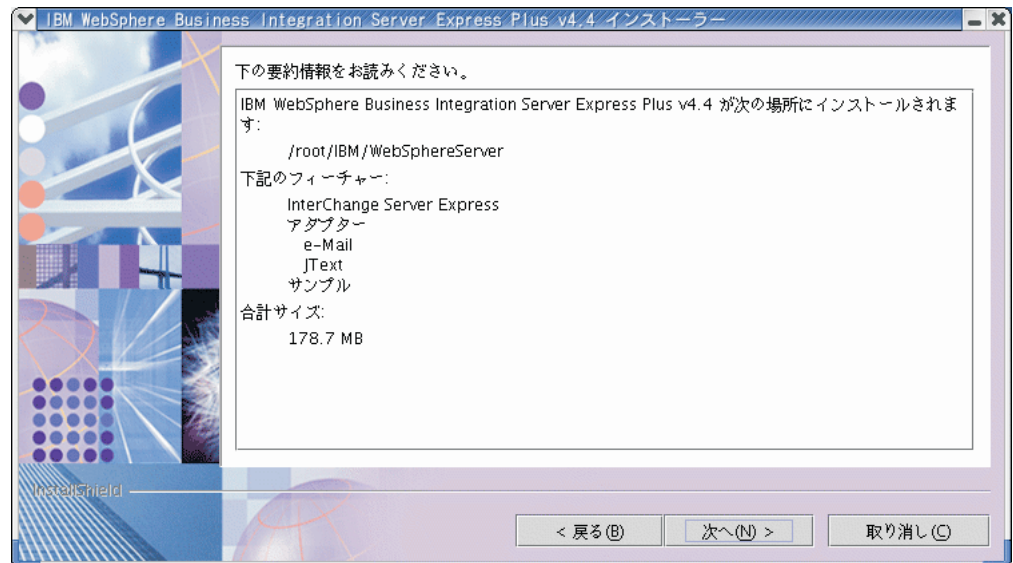


図9. 「要約」画面

8. 「要約」画面には、選択したインストールの選択肢の要約が表示されます。内容を読んで正しいことを確認し、「次へ」を選択します。

インストール・プロセスが開始されます。

9. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「戻る」ボタンと「キャンセル」ボタンのみが使用可能になっているパネルが表示されます。この場合は、指定のドライブにある程度の空きスペースを作成するか、または「宛先」画面に戻ってまったく別の場所に宛先を変更する必要があります。

- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、処理が正常に終了したか、または問題が発生したかを示す画面が表示されます。「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

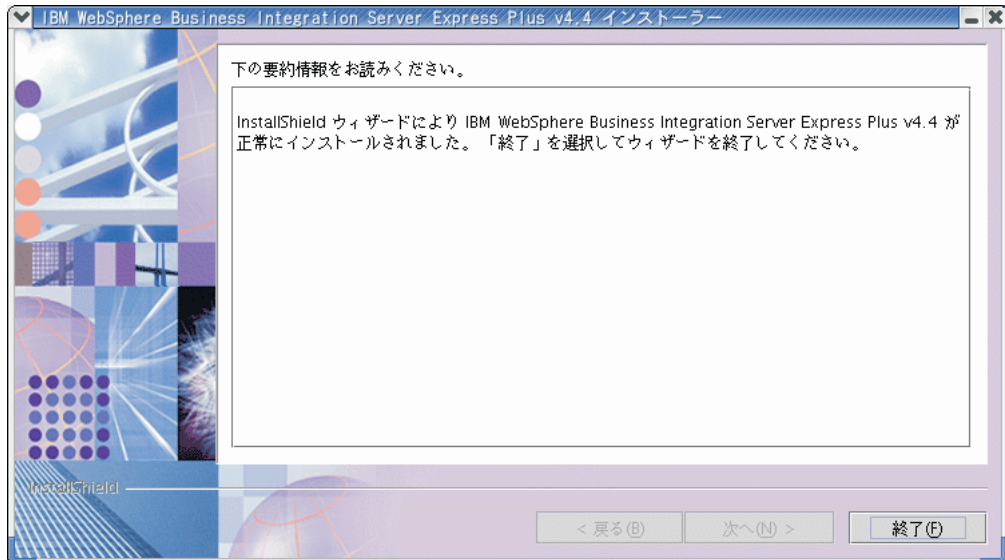


図 10. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面

インストールが完了したことを通知するウィンドウが表示され、First Steps アプリケーションを起動するかどうかを尋ねられます。このアプリケーションの詳細については、23 ページの『First Steps の使用』のセクションを参照してください。


インストール・プロセスでは、以下の処理が完了しました。

- 製品コンポーネントがインストールされました。
- InterChange Server Express が使用する InterchangeSystem.cfg ファイルが構成されました。
- WebSphere MQ のキュー・マネージャーが構成されました。
- LD_ASSUME_KERNEL という新規システム変数が /etc/profile ファイルに追加され、その値が 2.4.19 に設定されました。
- プラットフォーム固有の構成および登録が提供されました。
- コンテンツが InterChange Server Express に配置されました。

ログ・ファイルがインストール・プロセス中に作成され、インストール・プロセスについて詳細に記述されます。ログ・ファイルは `ProductDir/log` ディレクトリーの `wbi_server_exp_install_log.txt` ファイルにあります。この時点で、25 ページの『ディレクトリー構造およびファイル』に示すシステムのファイルおよびディレクトリー構造を見ることができます。

「カスタム」インストール

このセクションでは、「カスタム」インストールに特有の 4 つのコンポーネント選択画面について説明します。これらの画面での操作が済んだら、ステップ 4 (12 ページ) を参照して、インストール・プロセスを完了してください。

注: 一部のチェック・ボックスにはヘルプ・アイコン  があります。チェック・ボックスの説明を見るには、このアイコンをクリックしてください。

インストール対象コンポーネントの選択

どのコンポーネントをインストールするかをシステムに伝えるには、以下のステップを実行します。

1. 「カスタム」ラジオ・ボタンを選択します。「サーバーのインストール」画面が表示されます。



図 11. 「サーバーのインストール」画面

2. 「サーバーのインストール」画面で、エントリー「**InterChange Server Express for Linux**」の横のチェック・ボックスがデフォルトで選択されています。以下のいずれかを実行します。
 - InterChange Server Express をインストールする場合は、「次へ」を選択します。
 - InterChange Server Express をインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。

注: InterChange Server Express のインストールを選択すると、管理ツールが自動的にインストールされます。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。



図 12. 「アダプターのインストール」画面

3. 「アダプターのインストール」画面で、インストールするアダプターを選択します。「次へ」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

注: Adapter for JText はデフォルトで選択されていますが、これは、Adapter for JText が、サンプル・コンポーネントの一部である System Test サンプルの実行に必要なことと、Quick Validate プロセスを完了してインストールを検査するために必要になることが理由です。Quick Validate の詳細については、35 ページの『第 5 章 インストールの検証』を参照してください。



図 13. 「サンプルのインストール」画面

4. 「サンプルのインストール」画面で、「サンプル」項目の横にあるチェック・ボックスがデフォルトで事前選択されています。これらのサンプルは、システムのインストール状態を検査するために使用できる Quick Validate プロセスに必要です。

- サンプル・コンポーネントをインストールする場合は、「次へ」を選択します。

注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

- サンプル・コンポーネントをインストールしない場合は、チェック・ボックスを選択解除して、「次へ」を選択します。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

「ソフトウェア前提条件」画面の詳細については、ステップ 4 (12 ページ) を参照してください。残りのインストール・プロセスについては、そのセクションの説明に従ってください。

注: リモートの IBM DB2 Universal Database を使用する予定の場合は、22 ページの『Launchpad によるデータベースのインストール』を参照してください。

「カスタム」インストールの追加情報

「カスタム」インストール・プロセス中、「宛先」画面からインストール先を選択すると、次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express のインストールを選択した場合は、「RBAC」画面が表示されます。

- InterChange Server Express コンポーネントのインストールを選択しなかった場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。

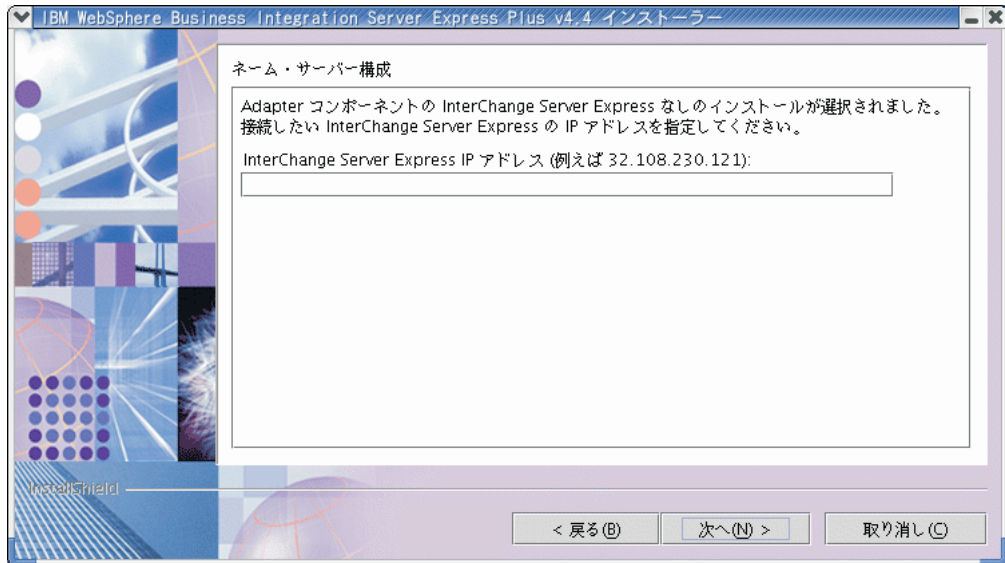


図 14. 「ネーム・サーバー構成」画面

「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「次へ」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。

`ProductDir/bin/CWSharedEnv.sh` ファイルの `ORB_HOST` キーには、この画面で入力した IP アドレスの値が入っています。この値を変更すると、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus による InterChange Server Express の検索場所が変更されます。

この手順が完了すると、「RBAC」画面が表示されます。ステップ 7 (15 ページ) に示すインストール手順を続けます。

ソフトウェア前提条件

「標準」インストールの場合、これらのコンポーネントが必須かオプションかはすでに決定しています。「カスタム」インストールの場合、必要な前提条件ソフトウェアは、インストールするコンポーネントに基づきます。一部またはすべてのコンポーネントがシステムにインストール済みかどうかを確認され、その分析結果は「ソフトウェア前提条件」画面に表示されます。

表 1 に、前提条件ソフトウェアを示します。画面に表示される表に含まれる項目がすべてになるか一部になるかは、選択したインストール・オプションに応じて異なります。

表 1. 考えられる前提条件ソフトウェア

前提条件ソフトウェア	説明
Java Development Kit 1.4.2	コラボレーション開発およびマッピング開発に必要です。
WebSphere MQ 5.3.0.2 (CSD06 以上の CSD レベル)	WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストールごとに必要です。
IBM DB2(R) Universal Database(TM) Express または Enterprise バージョン 8.1 フィックス パック 5 (FP5) 以上、および 8.2	サーバーの内容を格納するために必要です。
WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 以上	System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかをインストールする予定の場合に必要です。詳しくは、47 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』を参照してください。
Tomcat 4.1.24 および 4.1.27	System Monitor、Failed Event Manager、または Web Deployment をインストールする予定だが、WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 またはそれ以上のバージョンを使用しない場合にのみ必要です。詳しくは、47 ページの『第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成』を参照してください。
リモート・マシン上の Web ブラウザー	System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment のいずれかを使用する予定の場合に必要です。

適切なデータベース・バージョンがすでにインストールされている場合、『データベースのインストールおよび構成』セクションに示されるように、正しく構成されていることを確認してください。

このシステムに前提条件ソフトウェアの旧バージョンがすでにインストールされている場合、Launchpad の動作の詳細と、バージョンに応じた必要な処理の詳細については、55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』を参照してください。

データベースのインストールおよび構成

このセクションでは、データベースをインストールまたは構成するときに必要な場合がある追加情報を示します。Launchpad を使用してデータベースをインストールする場合は、データベースは自動的に WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の要件に応じて構成されます。

データベース要件

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus は、IBM DB2 Universal Database (UDB) Express または Enterprise バージョン 8.1 FP5 以上、および 8.2 をサポートします。IBM DB2 Express または Enterprise は、次の基準を満たすように構成する必要があります。

- データベースおよび表作成特権を持つ WebSphere Business Integration Server Express 管理者ユーザーまたは Express Plus 管理者ユーザーが作成されている。

- データ・ファイルのディスク・スペースとして 50 MB が InterChange Server Express リポジトリ・データベースに使用できる。
- maxappls および maxagents パラメーターがそれぞれ 50 以上のユーザー接続で構成されている。
- マッピング・テーブル (オプション) 用テーブル・スペースが 50 MB 以上のデータを格納できるように構成されている。
- アプリケーションの最大ヒープ・サイズが 2048 以上になるように構成されている。

注: DB2 ストアード・プロシージャを作成するには、DB2-stored にサポートされている C または C++ コンパイラが必要です。ストアード・プロシージャの詳細については、DB2 資料を参照してください。

Launchpad によるデータベースのインストール

以下の情報は、Launchpad を使用してデータベースをインストールするときに役立ちます。

- サポートされるデータベースがインストールされていない場合は、IBM DB2 UDB バージョン 8.2 Express のインストールを起動するためのボタンが表示されます。

「カスタム」インストールを実行している場合は、ローカル・データベースまたはリモート・データベースを選択するオプションがあります。ローカル・データベースを使用する場合は、以下の手順に従います。

1. 「ローカル・データベースを使用」を選択して、「**継続**」を選択します。
2. 次の画面でユーザー名とパスワードを作成して、「**継続**」を選択します。

この結果、Launchpad によってデータベースがインストールされ、構成されます。

リモート・データベースを使用する場合は、以下の手順に従います。

1. 「リモート・データベースを使用」を選択して、「**継続**」を選択します。
2. リモート・データベースで使用されているユーザー名とパスワードを入力して、「**継続**」を選択します。

注: リモート・データベースを使用するには、その前に有効な DB2 クライアントをインストールし、別名 SMB_DB を使用してリモート・データベースに接続しておく必要があります。

ここで、Launchpad により、リモートの SMB_DB データベースへの接続が確立できていることが検査されます。接続できない場合は、エラー・メッセージと、入力した情報を変更するためのオプションが表示されます。接続できる場合は、Launchpad によってデータベースが構成されます。

- IBM DB2 Express または Enterprise バージョン 8.1 FP5 以上、または 8.2 が既にインストールされている場合は、既存インストールの構成を起動するためのボタンが表示されます。
- IBM DB2 Express または Enterprise が正常に構成された後、データベース構成が完了したというメッセージが表示されます。構成プロセスでは、以下の処理が行われます。

- 次の DB2 ユーザーが作成されます。
 - db2inst1
 - db2fenc1
 - dasusr1
- SMB_DB という名前のデータベースが作成されます。
- データベースの構成またはインストール時に選択したユーザー名に、適切な権限が付与されます。

リモート・マシンへの Web ブラウザーのインストール

Web ブラウザーは、System Monitor、Failed Event Manager、および Web Deployment をインストールする場合に必要です。このブラウザは、Windows プラットフォームで稼働するリモート・マシン上に存在し、かつ到達可能でなければなりません。サポートされる Web ブラウザーのリストについては、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。

First Steps の使用

First Steps アプリケーションは、単一のインターフェースで、これを使用して WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を使用および管理します。

First Steps は、Launchpad または CD から起動するか、コンピューターの始動時に開くように構成することができます。First Steps を起動した時点で WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がインストールされていない場合、First Steps の大半の機能は使用不可になり、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus 製品を先にインストールするよう指示されます。

このセクションでは、このアプリケーションの使用とその各種コンポーネントの詳細に関する情報を示します。

「ようこそ」

「ようこそ」画面は、First Steps アプリケーションが起動すると、デフォルトで開きます。この画面には、次回にコンピューターがリブートしたときに First Steps を起動するかどうかを指定するためのチェック・ボックスがあります。このチェック・ボックスは、デフォルトで選択されています。このチェック・ボックスのチェック・マークを外す場合は、First Steps を手動で起動する必要があります。これを行うには、コンピューターが始動した後に `ProductDir/bin/first_steps.sh` コマンドを実行します。First Steps が CD から起動され、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus がまだマシンにインストールされていない場合、このチェック・ボックスは使用不可になります。



図 15. First Steps の「ようこそ」画面

「Quick Validate」

これをクリックすると、インストールが正常に完了したことの検証方法を説明する Quick Validate オンライン・ヘルプが表示されます。

「サーバーを始動」または「サーバーを停止 (Stop Server)」

これをクリックすると、InterChange Server Express が停止または始動します。サーバーを停止する場合は、InterChange Server Express のユーザー名とパスワードを求めるプロンプトが表示されます。



図 16. 「サーバーを始動」画面

「製品情報」

これをクリックすると、Web ブラウザーが起動し、WebSphere Business Integration Information Center の URL に移動します。

「終了」

これをクリックすると、First Steps アプリケーションが終了します。

ディレクトリー構造およびファイル

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールが完了したら、結果のファイル・システムとその内容を表示できます。ディレクトリーは、デフォルトで Home_directory/IBM/WebSphereServer ディレクトリー (本書では *ProductDir* と呼ぶ) の下に配置されます。

注: *ProductDir* に表示される特定のファイルおよびディレクトリーは、インストール時に選択したコンポーネントによって異なります。実際のインストールのファイルおよびディレクトリーは、以下に示すものとは異なる場合があります。

表2. WebSphere Business Integration Server Express と Express Plus のインストール環境のディレクトリー構造

ディレクトリー名	内容
<ul style="list-style-type: none"> • <code>_uninstWBIserverExp4.4</code> (WebSphere Business Integration Server Express インストール) • <code>_uninstWBIserverExpPlus4.4</code> (WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール) 	このディレクトリーには、Java 仮想マシン (JVM)、および WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の削除に使用する実行可能ファイルがあります。
<code>_uninstZip</code>	このディレクトリーには、インストール中に <code>unzip</code> されたすべてのファイルのリストがあります。
<code>AdapterJRE</code>	このディレクトリーには、アダプターが使用する IBM Java ランタイム環境 (JRE) ファイルがあります。
<code>bin</code>	このディレクトリーには、システムが使用する実行可能ファイルおよび <code>.sh</code> ファイルがあります。
<code>collaborations</code>	このディレクトリーには、インストールされたコラボレーションの <code>.class</code> ファイルやメッセージ・ファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
<code>connectors</code>	このディレクトリーには、システムの各アダプターに固有のファイルがあります。アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有ファイルもあります。
<code>DataHandlers</code>	このディレクトリーには、システムが使用するデータ・ハンドラーの <code>.jar</code> ファイルがあります。
<code>DevelopmentKits</code>	このディレクトリーには、開発者がさまざまなシステム・コンポーネントを作成する際に役立つサンプル・ファイルがあります。提供されるサンプルは、Server Access for EJB、Server Access for J2EE Connector Architecture、コネクタ (C++ および Java)、および Object Discovery Agents です。
<code>DLMs</code>	このディレクトリーには、Dynamic Loadable Module (DLM)、および InterChange Server Express マップに関するその他のファイルを格納するサブディレクトリーがあります。
<code>FirstSteps</code>	Quick Validate ファイルと共に、First Steps ファイルが含まれます。
<code>jre</code>	このディレクトリーには、IBM Java ランタイム環境 (JRE) ファイルがあります。
<code>legal</code>	このディレクトリーにはライセンス・ファイルがあります。
<code>lib</code>	このディレクトリーにはシステム用の <code>.jar</code> ファイルがあります。
<code>log</code>	このディレクトリーには、さまざまなログ・ファイルがあります。
<code>messages</code>	このディレクトリーには、生成されたメッセージ・ファイルがあります。
<code>mqseries</code>	このディレクトリーには WebSphere MQ 固有のファイル (一部実行可能ファイルを含む) があります。
<code>ODA</code>	このディレクトリーには、各エージェントのオブジェクト・ディスカバリー・エージェント <code>.jar</code> ファイルおよび <code>.sh</code> ファイルがあります。

表 2. WebSphere Business Integration Server Express と Express Plus のインストール環境のディレクトリー構造 (続き)

ディレクトリー名	内容
repository	このディレクトリーには、システム・コンポーネントの定義があります。
Samples	このディレクトリーには、ベンチマーク・サンプル用のコンポーネント定義、およびコラボレーション用のサンプル・メール・ファイルがあります。
src	このディレクトリーには、相互参照用の Relationship Service API のサンプルがあります。
templates	このディレクトリーには、start_connName.sh ファイルがあります。
WBFEM	このディレクトリーには、Failed Event Manager ファイルがあります。
wbiart	このディレクトリーには、アダプター・ランタイムに関するファイルがあります。
WBSM	このディレクトリーには、System Monitor ファイルがあります。
WBWD	このディレクトリーには Web Deployment ファイルがあります。

初期インストール後の追加コンポーネントのインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後に、追加コンポーネントをインストールすることができます。これを行うには、Launchpad の左側のパネルから「製品のインストール」ボタンを選択します。これにより Launchpad には、インストールするコンポーネントを選択する画面が表示されます (詳細は、17 ページの『「カスタム」インストール』を参照)。特定の画面から一部のコンポーネントをすでにインストールした場合、選択画面は表示されますが、すでにインストールされたコンポーネントの横のチェック・ボックスは使用不可になります。

要確認: 追加のコンポーネントをインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。

Launchpad は、新規 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus コンポーネントのインストールと同様に、追加ソフトウェア前提条件が必要かどうかを新規の選択内容に基づいて決定し、そのインストールをガイドします。

GUI を使用した WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール

IBM には、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus インストール全体を削除する、あるいは特定コンポーネントを選択して削除するアンインストール GUI プログラムがあります。アンインストーラー・プログラムは、前提条件ソフトウェアをアンインストールしません。前提条件ソフトウェアの削除は、特定の前提条件ソフトウェアに用意されている説明に従って、手動で行う必要があります。

要確認: 製品をアンインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. WebSphere Business Integration Server Express をインストールしたか Express Plus をインストールしたかに応じて、次のいずれかのコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。
 - `ProductDir/_uninstWBIServerExp4.4/uninstaller.bin` (WebSphere Business Integration Server Express システム)
 - `ProductDir/_uninstWBIServerExpPlus4.4/uninstaller.bin` (WebSphere Business Integration Server Express Plus システム)

アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。

2. アンインストールの「ようこそ」画面で、「次へ」を選択します。

「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。

3. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「次へ」を選択します。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「プリアンインストール・サマリー (pre-uninstallation summary)」画面で、「次へ」を選択して、選択内容を確認します。選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除されます。

「ポストアンインストールの終了 (post-uninstallation finish)」画面が表示されません。

5. 「ポストアンインストールの終了 (post-uninstallation finish)」画面で「完了」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

注: `Home_directory/IBM/WebSphereServer` ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

次のステップに進む

ソフトウェア前提条件や WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を正常にインストールしたら、29 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に進みます。

最初に 29 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』、次に 35 ページの『第 5 章 インストールの検証』の順で指示に従えば、WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする予定の場合でも、基本システムが正しくインストールされ、正常に動作するかを、追加コンポーネントのインストール前に検証できます。

第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理

システムを始動するには、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントを起動する必要があります。システムを効率的に管理するには、接続された Windows マシン上で System Manager ツールを起動して、InterChange Server Express を System Manager に登録する必要があります。System Manager は、Windows 2003 および Windows XP プラットフォームでのみサポートされます。

注: この章で説明されているタスクは、First Stepsアプリケーションか、または Windows の「スタート」メニューから実行できます。この章では、Linux コマンドと System Manager を使用して各種コンポーネントを開始する方法について説明します。First Steps から開始しても構いません。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』
- 30 ページの『InterChange Server Express のセットアップ』
- 32 ページの『次のステップに進む』

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus を始動するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、WebSphere MQ キュー・マネージャーおよびリスナーを始動します。

```
/opt/mqm/bin/strmqm WebSphereICS.queue.manager  
/opt/mqm/bin/runmqtsr -t TCP -p 1414 -m WebSphereICS.queue.manager
```

注: WebSphere MQ で 4 MB 以上のビジネス・オブジェクトを処理するには、使用するキュー・マネージャー、キュー、およびチャネルの「**最大メッセージ長 (Maximum Message Length)**」プロパティのデフォルト値を変更する必要があります。これらの値を変更するには、以下の作業を行います。

- a. 次のコマンドを入力します。

```
ALTER QMGR MAXMSGL(104857600)  
ALTER QLOCAL(queue_name) MAXMSGL(104857600)  
DEFINE CHANNEL(channel_name) CHLTYPE(SVRCONN) TRPTYPE(TCP) *  
MAXMSGL(104857600)
```

- b. WebSphere MQ をシャットダウンして再始動します。

2. 次のコマンドを入力して、InterChange Server Express と永続ネーミング・サーバーを始動します。

```
ProductDir/bin/ics_manager -start
```

サーバーが稼働中で、準備ができていることを検証するには、*ProductDir* の *InterChangeSystem.log* ファイルに、次のメッセージがあるかを確認してください。

```
InterChange Server "WebSphereICS" is ready
```

InterChange Server Express のセットアップ

InterChange Server Express を効率的に管理するには、InterChange Server Express を System Manager に登録し、System Manager を通じて InterChange Server Express に接続する必要があります。以下のセクションでは、これらのタスクを実行する方法について説明します。

- 『リモートの Windows マシンで System Manager を始動する』
- 『InterChange Server Express を System Manager に登録する』
- 31 ページの『InterChange Server Express への接続』
- 31 ページの『InterChange Server Express のパスワードの変更』
- 32 ページの『InterChange Server Express の再始動』

リモートの Windows マシンで System Manager を始動する

System Manager は、InterChange Server Express およびリポジトリとの GUI です。これは、Windows XP および Windows 2003 プラットフォームでのみ稼働します。

System Manager を始動するには、リモートの Windows マシン上で、「スタート」 > 「プログラム」 > 「IBM WebSphere Business Integration Express」 > 「Toolset Express」 > 「管理」 > 「System Manager」を選択します。

注: System Manager パースペクティブがデフォルトで表示されます。表示されない場合は、IBM Eclipse SDK メニュー・バーで「ウィンドウ」 > 「パースペクティブを開く」 > 「その他」を選択して、「System Manager」をダブルクリックすれば、System Manager が始動します。

InterChange Server Express を System Manager に登録する

System Manager では、InterChange Server Express のインスタンスを管理できます。管理したいインスタンスは、System Manager に登録する必要があります。サーバーを登録すると、その名前は、サーバーが削除されない限り常に System Manager に表示されます。

InterChange Server Express インスタンスを登録するには、以下のステップに従います。

1. System Manager をホスティングする Windows クライアントがネーム・サーバーに正しくアクセスできるようにするため、*ProductDir*¥bin¥CWSharedEnv.bat ファイルの ORB_HOST プロパティが、InterChange Server Express を稼働しているマシンの IP アドレスに設定されていることを確認します。このように設定されていない場合は、この値を設定するため、Windows クライアントのコマンド行で次のコマンドを入力してください。

```
set ORB_HOST=IP_address
```


注: あるいは、ORB_HOST=*machine_name* と設定して、
%windir%\system32\drivers\etc\hosts ファイルに *IP_address*
machine_name 行を追加します。この例では、*IP_address* は InterChange
Server Express をホスティングするマシンの IP アドレスで、*machine_name*
は InterChange Server Express をホスティングするマシンの名前です。

2. ネーム・サーバーが Linux マシン上の InterChange Server Express を名前で正しく検索できるようにするため、Linux マシン上の /etc/hosts ファイルに次のようなエントリーがあることを確認します。

```
ip_address localhost.localdomain localhost
```

3. System Manager で、左ペインの「InterChange Server インスタンス」を右マウス・ボタンでクリックして、「サーバーを登録」を選択します。
4. 「新規サーバーを登録」ダイアログ・ボックスで、InterChange Server Express の名前をブラウズするか、入力します。

注: 統合テスト環境でサーバーを使用する予定の場合は、「テスト・サーバー」チェック・ボックスを選択します。統合テスト環境は、ローカル・テスト・サーバーとして登録されたサーバーとのみ通信します。

5. ユーザー名とパスワードを入力して、「ユーザー ID およびパスワードを保管」チェック・ボックスを選択します。このユーザー名とパスワードは、Launchpad インストール・プロセス中に「RBAC」画面で入力したユーザー名とパスワードと同じにする必要があります。
6. 「OK」を選択します。

サーバー名が System Manager ウィンドウの左ペインに表示されます。表示されない場合は、「InterChange Server インスタンス」フォルダーを展開してください。

InterChange Server Express への接続

登録された InterChange Server Express が稼働していることを、接続によって検証します。System Manager を使用して InterChange Server Express に接続するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインにある InterChange Server Express の名前を右マウス・ボタンでクリックして、「接続」を選択します。
2. 「サーバー・ユーザー ID およびパスワード」確認画面で「OK」を選択します。

ヒント: System Manager の左ペインにある InterChange Server Express の名前の横のアイコンが緑色であれば、InterChange Server Express はすでに System Manager に接続しています。

InterChange Server Express のパスワードの変更

InterChange Server Express は、InterChange Server Express 管理者だけが知っているパスワードによって保護されます。このパスワードは、インストール時に「RBAC」画面で作成されました。セキュリティのためにパスワードを変更したい場合は、システムのセットアップ後に変更できます。

InterChange Server Express のパスワードを変更するには、以下のステップに従います。

1. System Manager で、左ペインの InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「パスワードのリセット」を選択します。
2. ダイアログが開くので、その中でユーザー名を選択して、旧パスワードおよび新規パスワードを入力し、確認のために新規パスワードを再入力して、「OK」を選択します。

InterChange Server Express の再始動

パスワードの変更を有効にするには、InterChange Server Express をシャットダウンして再始動する必要があります。その手順は以下のとおりです。

1. System Manager で、左ペインにある稼働中の InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、「シャットダウン」を選択します。
2. 「サーバーをシャットダウン」ダイアログ・ボックスで、現在の作業を終了した後にサーバーを正常にシャットダウンするか、あるいはクリーンアップを実行しないで即時にシャットダウンします。

「正常」を選択して、「OK」を選択します。

注: 待たずにサーバーをシャットダウンする必要がある場合のみ、「即時に」を選択してください。

3. 次のコマンドを入力して、InterChange Server Express を再始動します。

```
ProductDir/bin/ics_manager -start
```

4. System Manager で InterChange Server Express 名を右マウス・ボタンでクリックして、InterChange Server Express に接続します。ダイアログが開くので、その中でサーバーのユーザー名とパスワードを入力して、「OK」を選択します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了しました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合に、インストールが正しく行われ、正常に動作することを検証するには、35 ページの『第 5 章 インストールの検証』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールしなかった場合は、次のいずれかを行います。
 - WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
 - オプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、37 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進みます。

- オプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 をインストール済みで、Express Plus V4.4 にアップグレードする場合は、55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 5 章 インストールの検証

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール時にサンプル・コンポーネントをインストールした場合は、System Test と呼ばれるサンプルが得られます。このサンプルを使用すると、インストールしたシステムの動作を検証できます。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『Quick Validate』
- 『次のステップに進む』

Quick Validate

システムが正常にインストールされ、稼働していることを確認するには、System Test サンプルを実行します。サンプルの実行に関する説明は、First Steps の「Quick Validate」ボタンを選択すると使用できるようになる、Quick Validate オンライン・ヘルプから参照できます。

注: 先に System Test サンプルを実行してから Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールすることをお勧めします。

サンプルを正常に実行したら、このセクションに戻り、『次のステップに進む』の内容をよく読んでください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストールは完了し、確認されました。以下のいずれかを実行します。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack または Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がない場合は、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んで、インストール時に選択したアダプターの構成の詳細を参照してください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus インストールのオプションの Adapter Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、37 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストールのオプションの Collaboration Capacity Pack をインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進んでください。
- WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 をインストール済みで、Express Plus V4.3.1 にアップグレードする場合は、55 ページの『第 9 章 システムのアップグレード』に記載されている情報を参照してください。

第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール

Launchpad は、Adapter Capacity Pack からのアプリケーション・アダプターのインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『GUI による Adapter Capacity Pack のインストール』
- 40 ページの『GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール』
- 40 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、79 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack のインストール

Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターを正常にインストールするには、ご使用のシステムが次に示す前提条件を満足する必要があります。

- WebSphere Business Integration Server Express は、アダプターのインストール先マシンと同じマシンにはインストールできません。(Adapter Capacity Pack に付属のアダプターと組み合わせて使用できるのは、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus インストール環境のみです。)
- アダプターを InterChange Server Express と同じマシンにインストールしない場合は、アダプターのインストール先と同じマシンに WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 Client for Linux のインストール環境が存在する必要があります。

Adapter Capacity Pack で提供されるインストール GUI は、一度に 1 つのアダプターのみをインストールします (したがって、Adapter Capacity Pack のインストーラーは、インストールするアダプターごとに別個に実行する必要があります)。アダプターのリストについては、39 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

Launchpad を呼び出してインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。
2. 2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Adapter Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack からアプリケーション・アダプターをインストールします。

「入力ユーザー」画面が表示されます。

3. 「入力ユーザー」画面で、Adapter Capacity Pack をインストールするユーザーの名前を入力し、「製品のインストール」を選択します。ダイアログが表示され、該当の CD をマシンに挿入するよう要求されます。

「ようこそ」画面が表示されます。

4. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されず。

5. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「キャンセル」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「フィーチャー (Feature)」画面が表示されます。

6. 「フィーチャー (Feature)」画面で、使用可能なアダプターのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、アダプターを 1 つ選択し、「次へ」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、39 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

次のいずれかの画面が表示されます。

- InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されます。この場合は、ステップ 9 (39 ページ) に進んでください。
 - InterChange Server Express がリモート・マシンに存在する場合は、「サーバー IP アドレスの構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 7 に進んでください。
7. 「サーバー IP アドレスの構成」画面で、InterChange Server Express をインストールしたコンピューターの IP アドレスを入力します。InterChange Server Express が OS/400 または i5/OS システムにインストールされている場合は、「**InterChange Server Express が OS/400 上にある**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択し、「次へ」を選択します。

次のいずれかの画面が表示されます。

- 「InterChange Server Express は OS/400 または i5/OS 上にあります。 (InterChange Server Express is on OS/400 or i5/OS)」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択した場合は、「サーバー名の構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 8 に進んでください。
 - 「InterChange Server Express は OS/400 または i5/OS 上にあります。 (InterChange Server Express is on OS/400 or i5/OS)」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択しなかった場合は、ステップ 9 (39 ページ) に進んでください。
8. 「サーバー名の構成」画面で、次の手順を実行します。

- a. OS/400 または i5/OS システムの InterChange Server Express インスタンスの名前を入力します。(デフォルトは QWBIDFT44 です。インスタンスに別の名前を付けた場合は、その名前を入力します。)
- b. ORB ポート番号を入力します。(デフォルトは 14500 です。別のポート番号を使用した場合は、その番号を入力します。)

次に、「次へ」を選択します。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されず。

9. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上のスペースをある程度解放する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。
10. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするアダプターの決定

Adapter Capacity Pack インストーラーを実行すると、次の中からアダプターのコンポーネントを 1 つ選択できます。

- Adapter for eMatrix
- Adapter for mySAP.com
- Adapter for Oracle Applications
- Adapter for WebSphere Commerce

注: 一部のアダプターには対応する Object Discovery Agents (ODA) があり、それら
のアダプターが選択されると、その ODA がインストールされます。いずれの
アダプターを選択した場合も、次のコンポーネントがインストールされます。

- XML データ・ハンドラー
- アダプター・フレームワーク

個々のアダプターの説明については、Web サイト

<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> にあるアダプターの
資料を参照してください。

GUI による Adapter Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Adapter Capacity Pack のインストール環境を削除するためのアンインストール GUI プログラムを用意しています。

アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。

```
ProductDir/_uninstAdapterCP4.4/uninstall.bin
```

アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。

2. アンインストールの「ようこそ」画面で、「次へ」を選択します。

「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面が表示されます。インストール済みのコンポーネントの横にはチェックマークが付いています。

3. 「アンインストール機能 (Uninstallation Feature)」画面で、削除するコンポーネントを選択状態のままにして、「次へ」を選択します。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「次へ」をクリックします。

選択されたコンポーネントがアンインストーラーによって削除され、「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

5. 「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

Collaboration Capacity Pack からのコラボレーションのインストールを計画しているかどうかに応じて、次のいずれかを実行します。

- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールする必要がある場合は、41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に進みます。
- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールする必要がない場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus およびこの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成に関する情報を得るために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進んでください。

第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack からオプションのコラボレーションをインストールすると、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境で、いずれかの コラボレーション・グループを使用できるようになります。(Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境では使用できません。)WebSphere Business Integration Server Express Plus の 1 つのインストール環境と組み合わせて使用するためにインストールできる Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、1 つだけです。

Launchpad は、Collaboration Capacity Pack からのコラボレーションのインストールをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。2 番目の GUI も用意されており、製品をアンインストールするときに使用します。サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールも可能です。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール』
- 44 ページの『GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール』
- 45 ページの『次のステップに進む』

サイレント・インストールおよびサイレント・アンインストールの実行手順については、79 ページの『サイレント・インストールおよびアンインストール』を参照してください。

GUI による Collaboration Capacity Pack のインストール

Collaboration Capacity Pack からコラボレーションを正常にインストールするには、ご使用のシステムが次に示す前提条件を満足する必要があります。

- Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールするマシンには、あらかじめ WebSphere Business Integration Server Express Plus をインストールしておく必要があります (Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にはインストールできません)。
- Collaboration Capacity Pack のコラボレーションは、InterChange Server Express のインストール先と同じマシンにインストールする必要があります。
- Collaboration Capacity Pack の既存のインストール環境を対象のマシンに構築することはできません。
- InterChange Server Express のコンポーネントは、稼動状態にできません。

Collaboration Capacity Pack のインストール GUI を使用すると、選択したコラボレーション・グループがインストールされ、インストールされた内容が InterChange Server Express に配置されます。

Launchpad を呼び出してこのインストール GUI を起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad で、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールします。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。

- InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを続けます。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
- InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面で、「**次へ**」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されず。

4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「**フィーチャー (Feature)**」画面が表示されます。

5. 「**フィーチャー (Feature)**」画面で、使用可能なコラボレーション・グループのリストから、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して、コラボレーション・グループを 1 つ選択し、「**次へ**」をクリックします。この画面から選択できるコラボレーション・グループの詳細については、43 ページの『インストールするコラボレーション・グループの決定』を参照してください。

「RBAC 情報」画面が表示されます。

6. 「RBAC 情報」画面で、役割ベースのアクセス制御を使用可能にするかどうかを示すよう求められます。以下のいずれかのオプションを実行します。

- 使用可能にする場合は、「**はい**」の横のラジオ・ボタンを選択し、インストール・プロセス中に作成したユーザー名とパスワード情報を入力します。次に、「**次へ**」を選択します。
- 使用可能にしない場合は、「**いいえ**」の横のラジオ・ボタンを選択し、「**次へ**」を選択します。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されず。

7. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上のスペースをある程度解放する必要があります。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。
8. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

インストールするコラボレーション・グループの決定

Collaboration Capacity Pack からコラボレーションをインストールすると、次の中からコラボレーション・グループを 1 つ選択できます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
- Collaborations for Order Management V1.0
- Collaborations for Procurement V1.0

各コラボレーション・グループは、次に示す個別のコラボレーションを複数集めて構成されます。

- Collaborations for Customer Relationship Management V1.0
 - Collaboration for Contact Manager
 - Collaboration for Contract Sync
 - Collaboration for Customer Manager
 - Collaboration for Customer Credit Manager
 - Collaboration for Installed Product
 - Collaboration for Billing Inquiry
 - Collaboration for Vendor Manager
- Collaborations for Financials and Human Resources V1.0
 - Collaboration for AR Invoice Sync
 - Collaboration for Department Manager
 - Collaboration for Employee Manager
 - Collaboration for GL Movement
 - Collaboration for Invoice Generation
- Collaborations for Order Management V1.0
 - Collaboration for ATP To Sales Order
 - Collaboration for Available To Promise

- Collaboration for Item Manager
- Collaboration for Price List Manager
- Collaboration for Sales Order Processing
- Collaboration for Order Billing Status
- Collaboration for Order Delivery Status
- Collaboration for Order Status
- Collaboration for Return Billing Status
- Collaboration for Return Delivery Status
- Collaboration for Return Status
- Collaboration for Contact Manager
- Collaboration for Customer Manager
- Collaboration for Trading Partner Order Management
- Collaborations for Procurement V1.0
 - Collaboration for Inventory Level Manager
 - Collaboration for Inventory Movement
 - Collaboration for BOM Manager
 - Collaboration for Purchasing
 - Collaboration for Vendor Manager

インストーラーは、対象のコラボレーション・グループに関連するすべてのファイルをインストールします。これには、すべてのコラボレーションが使用する一連の汎用ビジネス・オブジェクトも含まれます。個々のコラボレーションに関する資料は、<http://www.ibm.com/websphere/wbiserverexpress/infocenter> でダウンロード、インストール、および表示することができます。

GUI による Collaboration Capacity Pack のアンインストール

IBM では、Collaboration Capacity Pack のインストール環境を削除するための アンインストール GUI プログラムを用意しています。アンインストール GUI を実行するには、以下の作業を行います。

1. 次のコマンドを入力して、アンインストール GUI を起動します。

```
ProductDir/_uninstCollabCP4.4/uninstall.bin
```

アンインストールの「ようこそ」画面が表示されます。

2. アンインストールの「ようこそ」画面で、「次へ」を選択します。

「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

3. 「プリアンインストール・サマリー (Pre-uninstallation Summary)」画面で、「次へ」をクリックします。アンインストーラーによってコンポーネントが削除されます。

「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面が表示されます。

4. 「ポストアンインストール・サマリー (Post-uninstallation Summary)」画面で、「終了 (**Finish**)」を選択して、アンインストール GUI を終了します。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境に Collaboration Capacity Pack を正常にインストールしたら、次に示す情報を取得するために、「システム・インプリメンテーション・ガイド」に進みます。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus またはオプションの Adapter Capacity Pack のインストール時に選択したアダプターの構成。
- コラボレーション・オブジェクト、ビジネス・オブジェクト、およびマップの構成。
- リポジトリへのオブジェクトの配置。

第 8 章 Web ベース・ツールの手動構成

この章で説明する Web ベース・ツールは、次のツールで構成されます。

- System Monitor
- Failed Event Manager (System Monitor に統合)
- Web Deployment

この章の内容は以下のとおりです。

- 48 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』
- 51 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』
- 53 ページの『次のステップに進む』

要確認: Web ベース・ツール・コンポーネントを使用する場合のみ、この章の説明に従ってください。

- WebSphere Application Server バージョン 5.1.1 以上、または WebSphere Application Server Express 5.1.1 以上を Web アプリケーション・サーバーとして使用しているが、これをインストールしたのは WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールした後である場合。この場合は、48 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』のセクションを参照してください。
- Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 を Web アプリケーション・サーバーとして使用している場合。この場合は、51 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』のセクションを参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をインストールする前に、サポートされるバージョンの WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がシステム上に存在していた場合は、この章の説明に従う必要はありません。この場合、Web ベース・ツールは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express と連動するように、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーによって自動的にインストールされ、構成されます。

この自動構成では、IBM HTTP Server などの Web サーバーがインストールされていないことを前提にしています。作成されるアプリケーション・サーバーの名前は、ICSMonitor です。Web ベース・ツールは、デフォルトのポート番号である 7089 を使用するよう構成されます。System Monitor と Failed Event には、URL <http://hostname:7089/ICSMonitor> でアクセスできます。Web Deployment の場合は、URL <http://hostname:7089/WebDeployment> です。

Web ベース・ツールについて

注: Web ベース・ツールを構成する要素は、次のとおりです。

- System Monitor
- Failed Event Manager
- Web Deployment

System Monitor

System Monitor とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムを Web からモニターするためのツールです。System Monitor を使用すると、データの表示方法や、現在のデータに加えて履歴データをどのように表示するかを構成できます。

Failed Event Manager

Failed Event Manager (System Monitor から起動される) とは、WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムで失敗したイベントを Web から処理し、失敗したイベントへの役割ベースのアクセスを提供する (Tomcat 4.1.24 以上を使用するシステムの場合のみ) ためのツールです。Failed Event Manager のセキュリティーを構成してカスタムの役割を作成する方法の詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

Web Deployment

Web Deployment とは、HTTP/S (ファイアウォールを容易にバイパスすることで知られるプロトコル) を使用して、リポジトリ・ファイルのコンポーネントを InterChange Server に配置し、また、逆に InterChange Server のコンポーネントをリポジトリ・ファイルにインポートすることの可能な、Web ベース・アプリケーションです。配置プロセスおよびインポート・プロセスの両方でブラウザー・ベースのユーザー・インターフェースが提供され、配置またはインポート対象のコンポーネントの一部または全てを選択することができます。

WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成

このセクションでは、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するように Web ベース・ツールを構成する方法について説明します。Tomcat を使用する手順の説明については、51 ページの『Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成』を参照してください。

Web ベース・ツールを構成して WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するには、WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus に付属のスクリプトを実行します。このスクリプトは `CWDashboard.sh` と呼ばれ、ディレクトリー `ProductDir/bin` に置かれています (`ProductDir` は、デフォルトではディレクトリー `Home_directory/IBM/WebSphereServer` を表します)。このスクリプトを実行すると、IBM HTTP Web Server などの Web サーバーとツールを連動させるかどうかを構成できます。

先に進む前に、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express バージョン 5.1.1 以上がインストール済みであることを確認します。(WebSphere Application Server Express バージョン 6.0 は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の Launchpad からインストールできます)。次に、使用環境で Web サーバーを使用するかしないかに応じて、次のいずれかのセクションに進みます。

- 『Web サーバー使用時の Web ベース・ツールの構成』
- 50 ページの 『Web サーバー不使用時の Web ベース・ツールの構成』

Web サーバー使用時の Web ベース・ツールの構成

WebSphere Application Server には、Web サーバーが付属しています。しかし、WebSphere Application Server Express には付属していません。WebSphere Application Server Express を使用していて、Web サーバーを使用する場合は、IBM HTTP Server (IBM Web サイトから無料で入手可能) および WebSphere Application Server Express の Web サーバー・プラグインを入手してインストールする必要があります。詳細については、WebSphere Application Server Express の資料を参照してください。

注: このセクションで、*WASInstDir* は WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express 5.1.1 以上がインストールされているディレクトリを指します。

Web ベース・ツールを構成して Web サーバーを使用するには、以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して *CWDashboard.sh* を実行します。
 - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のインストール・パス。例えば、*/opt/IBM/WebSphere/Express60/AppServer*
 - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、*hostname.ibm.com*
 - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリ。例えば、*Home_directory/IBM/WebSphereServer*
 - DB2 インストール環境の *java* ディレクトリへのパス。例えば、*DB2_Installation_Dir/java*
 - *y* (HTTP サーバーの場合は *yes*)

コマンド例を以下に示します。

```
Home_directory/IBM/WebSphereServer/CWDashboard.sh          ¥
"opt/IBM/WebSphere/Express60/AppServer"                    ¥
hostname.ibm.com "Home_directory/IBM/WebSphere/Server"     ¥
"DB2_Installation_Dir/java" y
```

要確認: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行され、その部分が円記号 (¥) で示されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。

2. WebSphere 管理者コンソール (リモート Windows マシンの Web ブラウザーからアクセス可能) から、左側ナビゲーション・ペインの「**環境 (Environment)**」

を展開し、「Web サーバー・プラグインの更新 (Update Web Server Plugin)」リンクを選択して (WebSphere Application Server Express 6.0 では選択不可)、「OK」を選択します。

3. ICSMonitor Application Server が開始された場合は、次のコマンドで停止します。

```
WASInstDir/bin/stopServer.sh ICSMonitor
```

4. ICSMonitor Application Server を次のコマンドで開始します。

```
WASInstDir/bin/startServer.sh ICSMonitor
```

5. System Monitor または Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname/ICSMonitor
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

6. Web Deployment にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname/WebDeployment
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

Web サーバー不使用時の Web ベース・ツールの構成

インストール環境で Web サーバーを使用していない場合は、異なるポート番号を使用するように Web ベース・ツールを構成する必要があります。以下の手順を実行します。

1. 以下のパラメーターを指定して、*ProductDir/bin/CWDashboard.sh* を実行します。
 - WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express のインストール・パス。例えば、*/opt/IBM/WebSphere/Express60/AppServer*
 - インストール先となるマシンの完全修飾ホスト名。例えば、*hostname.ibm.com*
 - WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール・ディレクトリー。例えば、*Home_directory/IBM/WebSphereServer*
 - DB2 インストール環境の *java* ディレクトリーへのパス。例えば、*DB2_Installation_Dir/java*
 - *n* (HTTP サーバーの場合は *no*)
 - 新しいポート番号。例えば、*7089*
 - 新しい SSL ポート番号 (デフォルトは *7043*)

コマンド例を以下に示します。

```
Home_directory/IBM/WebSphereServer/CWDashboard.sh      ¥  
"/opt/IBM/WebSphere/Express60/AppServer"              ¥  
hostname.ibm.com "Home_directory/IBM/WebSphereServer  ¥  
"DB2_Installation_Dir/java" n 7089 7043
```

要確認: この手順中のいくつかのステップでは、1 つ以上の行でコマンドが改行され、その部分が円記号 (¥) で示されています。これらの改行が挿入されたのは、ページ内にテキストが収まるようにするためです。実際にコマンドを入力する場合は、これらの箇所に改行ではなくスペースを挿入してください。

2. ICSMonitor Application Server が開始された場合は、次のコマンドで停止します。

```
WASinstDir/bin/stopServer.sh ICSMonitor
```

3. ICSMonitor Application Server を次のコマンドで開始します。

```
WASinstDir/bin/startServer.sh ICSMonitor
```

4. System Monitor および Failed Event Manager にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname:portnumber/ICSMonitor
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

5. Web Deployment にアクセスするには、次の URL を入力します。

```
http://hostname:portnumber/WebDeployment
```

ここで、*hostname* は、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express がインストールされているコンピューターの名前です。

Tomcat を使用するための Web ベース・ツールの構成

このセクションでは、Tomcat を使用するように Web ベース・ツールを構成する方法について説明します。Tomcat ではなく、WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を Web アプリケーション・サーバーとして使用する場合の手順については、48 ページの『WebSphere Application Server または WebSphere Application Server Express を使用するための Web ベース・ツールの構成』を参照してください。先に進む前に、Tomcat バージョン 4.1.24 または 4.1.27 がシステムにインストールされていることを確認してください。

注: Tomcat 4.1.24 および 4.1.27 は、2 バイト文字セット (DBCS) の言語環境ではサポートされていません。

System Monitor および Failed Event Manager の構成による Tomcat の使用

System Monitor および Failed Event Manager を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. ICSMonitor ディレクトリーを *Tomcat_home/webapps* ディレクトリーに作成します (*Tomcat_home* は、ご使用の環境における Tomcat のインストール先へのパスを表します)。
2. *.war* ファイルの内容を ICSMonitor ディレクトリーに解凍します。

注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを使用して製品をインストールした場合、CWDashboard.war ファイルは *ProductDir*/WBSM ディレクトリーに置かれています。

3. 次の手順を実行して、*Tomcat_home*/bin ディレクトリーにある *setclasspath.sh* ファイルを編集します。

- a. JAVA_OPTS プロパティを次のように設定します。

```
-DDASHBOARD_URL=http://HostName[:PortNumber]/ICSMonitor
-DDASHBOARD_HOME=Tomcat_home/webapps/ICSMonitor
-DFEM_HOME=Tomcat_home¥webapps¥ICSMonitor
-DORBNamingProvider=CosNaming
-Dorg.omg.CORBA.ORBClass=com.ibm.CORBA.iiop.ORB
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialPort=ORB_PORT
-Dorg.omg.CORBA.ORBInitialHost=ORB_HOST
-Dcom.ibm.CORBA.Debug.Output=stdout
```

要確認: 文字 `-D` で始まる行は、ページ内に収まるようにすべて別個の行として表示してあります。`-D` で始まる行の間は、改行ではなく、必ずスペースを挿入してください。

- b. *db2java.zip* ファイルへのパスを *setclasspath.sh* のクラス・パスに追加します。*db2java.zip* ファイルは、デフォルトでは *DB2_Installation_Dir*/java ディレクトリーにあります。

4. (オプション) *Tomcat_home*/conf/server.xml ファイルのポート番号を変更します。

デフォルト・ポート番号は 8080 です。

5. 次のように入力して、Tomcat を開始します。

```
Tomcat_home/bin/startup.sh
```

Tomcat を使用するための Web Deployment の構成

Web Deployment を構成して Tomcat を使用するには、以下の手順に従います。

1. *Tomcat_home*/webapps の下に Web Deployment ディレクトリーを作成します (*Tomcat_home* は、ご使用の環境における Tomcat のインストール先へのパスを表します)。
2. .war ファイルの内容を WebDeployment ディレクトリーに解凍します。

WebDeployment.war ファイルは、*ProductDir*/WBWD ディレクトリーにあります。

注: WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストーラーを使用して製品をインストールした場合、WebDeployment.war ファイルは *ProductDir*¥WBWD ディレクトリーに置かれています。

3. 次の手順を実行して、*Tomcat_home*/bin ディレクトリーにある *setclasspath.bat* ファイルを編集します。

- a. JAVA_OPTS プロパティを次のように設定します。

```
DWD_HOME=Tomcat_home/webapps/WebDeployment
```

- b. InterChange Server Express リポジトリーに DB2 を使用している場合、*setclasspath.bat* 内のクラスパスに *db2java.zip* ファイルへのパスを追加します。*db2java.zip* ファイルは、デフォルトでは *DB2_Installation_Dir*/java ディレクトリーにあります。

注: ステップ 5b は、リポジトリが DB2 上にある場合のみ必要です。

4. (オプション) `Tomcat_home/conf/server.xml` ファイルのポート番号を変更します。

デフォルト・ポート番号は 8080 です。

5. 次のように入力して、Tomcat を開始します。

```
Tomcat_home/bin/startup.sh
```

デフォルトでは、Web Deployment の Tomcat 4.1.24 バージョンのセキュリティー機能が使用可能になっています。管理者がアプリケーションに対する全アクセス権限を取得できるように、管理者の役割を持つユーザーを `Tomcat_home/conf/server.xml` ファイルに作成する必要があります。Web Deployment での役割の作成方法やセキュリティー機能の使用の詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

次のステップに進む

システムの前条件ソフトウェアのインストール、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール、Web ベース・ツールの構成が正常に完了したら、29 ページの『第 4 章 WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムの始動および管理』に記載されている WebSphere Business Integration Server Express システムまたは Express Plus システムの始動方法に関する説明に進んでください。

第 9 章 システムのアップグレード

この章では、既存の WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストールをアップグレードする場合の一般的な手順を説明します。このセクションの内容は以下のとおりです。

- 『サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項』
- 59 ページの『既存のシステムの準備』
- 62 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 65 ページの『WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード』
- 68 ページの『WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード』
- 76 ページの『新規のアップグレード・バージョンの始動』
- 77 ページの『アップグレードの検証』
- 77 ページの『アップグレード・バージョンのテスト』
- 77 ページの『アップグレード・バージョンのバックアップ』
- 78 ページの『次のステップに進む』

サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項

以下のアップグレード・シナリオがサポートされています。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のインストールを Express バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。このシナリオには、以下のアップグレードを実行するための指示も含まれています。
 - Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 をバージョン 4.4 にアップグレードする。
 - Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 をバージョン 4.4 にアップグレードする。

以下のアップグレード・シナリオはサポートされていません。

- WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.3.1 のインストールを Express Plus バージョン 4.4 にアップグレードする。
- WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.3.1 のインストールを Express バージョン 4.4 にアップグレードする。

アップグレード手順では、すでにインストール済みのコンポーネントはアップグレード用に事前選択され、選択解除することはできません。まだインストールしてい

ない追加コンポーネントは、アップグレード処理中に選択できます。すべてのアップグレード手順では、以下の条件を前提としています。

- アップグレードを開発環境で実行し、システム・テスト完了後にアップグレード済みソフトウェアを実稼働環境に移行する予定である。
- 該当するすべてのソフトウェアが使用可能である。必須ソフトウェアのリストについては、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。
- アップグレード手順は、InterChange Server Express コンポーネントに対して実行するとともに、別々のマシンに存在する場合はさまざまなマシンでインストーラーを実行して、アダプターおよびサンプル・コンポーネントに対しても実行する。

既存のユーザー・プロジェクトの保存

既存の WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムで定義されたすべてのユーザー・プロジェクトは、ツールとともにローカル・マシンに格納されます。インストーラーを実行して別のバージョンの WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus にアップグレードすると、新規にアップグレードされたツールは、既存のユーザー・プロジェクトが存在する System Manager ワークスペースへのパスを自動的に認識しません。

すべての System Manager プロジェクト (ユーザー・プロジェクトおよび統合コンポーネント・ライブラリー) を有効にするには、次のいずれかを行います。

- 既存のユーザー・プロジェクトをアップグレードの前にソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、アップグレード後に新規のインストール環境にインポートすることにより、既存のユーザー・プロジェクトをマイグレーションする。これが推奨の方法です。
- アップグレード後、System Manager のワークスペース・パスを変更し、元のユーザー・プロジェクトが存在する元のワークスペースの場所を指すようにする。

既存のプロジェクトのマイグレーション

既存のプロジェクトをマイグレーションするには、まずプロジェクトをソリューションとして一時的な場所にエクスポートし、その後、新規にアップグレードされた System Manager にインポートして戻します。

ユーザー・プロジェクト・ソリューションのエクスポート

ユーザー・プロジェクトと、ユーザー・プロジェクトがソリューションとして参照する統合コンポーネントをエクスポートするには、以下の手順を実行します。

注: ソリューションをエクスポートすると、そのソリューションとして選択するユーザー・プロジェクトに含まれている統合コンポーネントとショートカットのみがマイグレーションされます。ユーザー・プロジェクトにショートカットとして含まれていない追加の統合コンポーネントもマイグレーションしたい場合は、System Manager を使用してコンポーネントをパッケージにエクスポートする手順 (「システム・インプリメンテーション・ガイド」に記載) も実行してください。

1. 「WebSphere Business Integration System Manager」ビューで、「ユーザー・プロジェクト」フォルダーを展開して「**InterChange Server プロジェクト**」フォルダーを右クリックし、コンテキスト・メニューから「**ソリューションをエクスポート**」を選択します。System Manager により、「ソリューションのエクスポート・ウィザード」が表示されます。
2. エクスポートするコンポーネントを選択するには、以下のオプションのいずれかを実行します。
 - ユーザー・プロジェクトの横にあるチェック・ボックスを有効にして、プロジェクト内のすべてのコンポーネントを選択します。
 - コンポーネント・グループの横にあるチェック・ボックスを有効にして、グループ内のすべてのコンポーネントを選択します。
 - コンポーネント・グループを強調表示し、右側のペインの個々のコンポーネントの横にあるチェック・ボックスを有効にして、これらのコンポーネントを選択します。
3. ソリューションのエクスポート先ディレクトリーの絶対パスと名前を、ウィザード画面の下部にあるテキスト・フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
4. 「**終了 (Finish)**」をクリックします。System Manager により、以下の処理が実行され、ステップ 3 で指定したディレクトリーにソリューションがエクスポートされます。
 - a. ショートカットが格納されている「ユーザー」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
 - b. ショートカットによって参照されている統合コンポーネント・ライブラリーのディレクトリーが格納されている「システム」ディレクトリーが、ソリューションのエクスポート時に選択されたユーザー・プロジェクトに作成されます。
5. エクスポート操作が正常に完了したことを示すプロンプトが表示されたら、「**OK**」をクリックします。

ユーザー・プロジェクト・ソリューションのインポート

InterChange Server Express を動作させた状態で、System Manager を InterChange Server Express インスタンスに接続し、以下の手順を実行します。

1. 「ユーザー・プロジェクト」フォルダーを展開し、「**InterChange Server プロジェクト**」を右クリックして、「**ソリューションのインポート**」を選択します。
2. エクスポートされたソリューションが存在するディレクトリーの絶対パスと名前を、「ソリューション・ディレクトリー名」フィールドに入力するか、または「**参照**」をクリックして、目的のディレクトリーへ移動します。
3. 「**終了 (Finish)**」をクリックします。System Manager により、統合コンポーネント・ライブラリーと、エクスポートされたソリューション内で定義されたユーザー・プロジェクトが、使用している環境に作成されます。

前提条件ソフトウェアのアップグレード

Launchpad インストール・インターフェースは、いくつかの前提条件ソフトウェアを自動的にアップグレードします。ただし、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の現行バージョンによるアップグレードがサポートされている前提条件ソフトウェアより前のバージョンの前提条件ソフトウェアがある場合は、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus をアップグレードする前に、前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする必要があります。(サポートされているバージョンの前提条件ソフトウェアについては、<http://www.ibm.com/software/integration/wbiserverexpress> を参照してください。)前提条件ソフトウェアは、何らかの他の理由がある場合、手動でアップグレードすることもできます。前提条件ソフトウェアを、現行リリース (WebSphere Business Integration Server Express 4.4) でサポートされているバージョンに手動でアップグレードすると、残りのアップグレードを実行するときに、Launchpad により、現行バージョンの前提条件ソフトウェアがあると検出されます。特定の前提条件ソフトウェアを手動でアップグレードする場合は、そのソフトウェアに用意されているアップグレード手順に従ってください。

以下のセクションでは、いくつかの前提条件ソフトウェアのアップグレード・シナリオや、任意のデータベースを対象に実行が必要な手順について説明します。ソフトウェアをアンインストールまたはアップグレードする前に、必ず 60 ページの『システムのバックアップ』のステップに従うようにしてください。

データベースのマイグレーション・オプション

WebSphere Business Integration Express システムのアップグレードを準備する場合、データベースをマイグレーションするためのオプションとして、インプレース・データベース・マイグレーションと非インプレース・データベース・マイグレーションの 2 つがあります。インプレース・データベース・マイグレーションとは、古いリポジトリを再利用し、WebSphere Business Integration Express サーバーの最初の始動時に、WebSphere Business Integration Express によってリポジトリのアップグレードを実行するという意味です。非インプレース・データベース・マイグレーションとは、新規で空のリポジトリ・データベースを使用したアップグレードという意味です。インプレース・データベース・マイグレーションについては、60 ページの『システムのバックアップ』に記載の特殊な手順に従うようにしてください。

IBM DB2 Universal Database

以前のバージョンの DB2 をアンインストールして、いずれのバージョンの DB2 も存在しない状態にすると、Launchpad により、DB2 バージョン 8.2 Express をインストールするよう求められます。

DB2 バージョン 8.1.5 以上をインストールしてある場合は、DB2 の新しいバージョンのインストールを Launchpad から要求されることはありません。この場合、8.2 より前のバージョンの DB2 を使用しており、バージョン 8.2 の DB2 にアップグレードするには、手動でアップグレードする必要があります。

注: サポートされているバージョンの DB2 (8.15 以上) がすでにインストールされている場合は、60 ページの『システムのバックアップ』に説明されている「インプレース」マイグレーションの手順に従ってください。

Microsoft SQL Server

Microsoft SQL Server 2000 をデータベースとして使用している場合は、Microsoft SQL Server のアップグレード手順に従って、手動でアップグレードする必要があります。Launchpad は、この製品を自動的にアップグレードしません。

IBM WebSphere Application Server

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus バージョン 4.4 は、WebSphere Application Server Express バージョン 6.0 および 5.1.1 をサポートします。バージョン 6.0 は、Launchpad がインストールしたバージョンです。5.1.1 より前のバージョンの WebSphere Application Server は、すべてアンインストールしてください。すでに 5.1.1 があり、6.0 にアップグレードする場合は、Launchpad によってアップグレードが要求されることはないため、手動でアップグレードする必要があります。

注: 以前のバージョンの WebSphere Application Server Express (WebSphere Application Server Express 5.1 や 5.1.1 など) 上に Launchpad を使用して WAS 6.0 Express をインストールすると、WAS のインストール環境がマシン上に 2 つ共存するようになることがあります。この場合、Launchpad は、Web ベース・ツールを WAS 6.0 Express インストール環境に配置します。

IBM WebSphere MQ サーバーおよびクライアント

以前のバージョンの WebSphere Business Integration Express によってサポートされている IBM WebSphere MQ の旧バージョンがインストールされている場合は、Launchpad により、サポートされるバージョンに自動的にアップグレードされます。例えば、MQ 5.3 CSD 05 がインストールされている場合は、Launchpad により、CSD 06 に自動的にアップグレードされます。

IBM Java Development Kit

Launchpad により、適切なバージョンの IBM JDK (バージョン 1.4.2) がインストールされます。前のバージョンを削除する必要はありません。

既存のシステムの準備

システムをアップグレードするには、その前に次の手順を実行する必要があります。

- 『システムを静止状態にする方法』
- 60 ページの『システムのバックアップ』
- 61 ページの『システムのシャットダウン』

システムを静止状態にする方法

システムをアップグレードするには、その前にシステムが静止状態であることを確認する必要があります。つまり、環境をバックアップしてアップグレード手順を実行する前に、進行中のイベントをすべて完了し、未確定のトランザクションをすべて解決します。

以下の手順では、システムを静止状態にする方法について説明します。

1. 失敗したイベントを再実行依頼するか、そのイベントを破棄します (このステップはオプションです)。
2. すべてのコネクタについてイベント表のポーリングを停止するため、コネクタの `PollFrequency` プロパティを `No` に設定してコネクタを再始動します。
3. 進行中のイベントを含め、システムですべてのイベントを実行します。必ず未確定トランザクションをすべて解決してください。
4. キューから以前のイベントをすべて除去することにより、キューをクリアします。

注: 手順 4 は、失敗したイベントを処理せずにアプリケーションから再実行依頼する場合のみ行ってください。それ以外の場合、キューは空になっているはずですが、念のため再確認してください。

実行中のシステムを正常に停止する方法については、「システム管理ガイド」を参照してください。

システムのバックアップ

システムのバックアップを作成すると、新規バージョンのインストール時に不注意でファイルを上書きしても、そのファイルを回復できます。アップグレード手順を実行する前に、静的データと動的データ (アップグレードにかかわらず定期的にバックアップされる変更可能データ) の両方のバックアップを作成します。静的データおよび動的データの例については、61 ページの表 3 を参照してください。

システムのバックアップを作成するには、以下の手順を行います。

- `repos_copy` ユーティリティを使用して、現在の ICS Express リポジトリをバックアップします。例えば、InterChange Server Express のインスタンスには `WICSEX` という名前が付いており、デフォルトのログイン ID 「admin」とデフォルトのパスワード 「null」があるものとします。次の `repos_copy` コマンドを実行すると、`RepositoryExpress.txt` というファイルにバックアップ・リポジトリ・オブジェクトが作成されます。

```
repos_copy -sWICSEX -oRepositoryExpress.txt -uadmin -pnull
```

- 製品ディレクトリをバックアップします。このバックアップに組み込まれる重要な項目は、次のようなすべてのカスタマイズ項目です。
 - カスタムの `.jar` ファイル (カスタム・データ・ハンドラーなど) および Java パッケージ。これらは、通常、製品ディレクトリの `lib` サブディレクトリにあります。
 - すべての始動スクリプト
 - 次のディレクトリにある WebSphere MQ の構成ファイル。

```
ProductDir%mqseries%crossworlds_mq.tst
```

IBM では、InterChange Server Express 製品ディレクトリ全体のシステム・バックアップをとることをお勧めします。

- システム管理者に依頼して、ファイル構造のバックアップを作成します。環境設定およびその他のファイルをコピーする必要があります。
- システム管理者に依頼して、IBM WebSphere MQ のバックアップを作成します。

- データベース管理者 (DBA) に依頼して、データベースのバックアップを作成します。これは、スキーマ情報、ストアド・プロシージャを含む完全なバックアップでなければなりません。ICS Express リポジトリ・データベースだけでなく、その他のデータベースも使用するためにシステムを構成した場合は、その他のデータベースのバックアップも同様に作成します。

注: このステップを実行するには、適切なデータベース・ユーティリティーを使用します。例えば、DB2 にはエクスポート・ユーティリティーが用意されています。手順については、データベース・サーバーの資料を参照してください。

表 3 に、各コンポーネントのバックアップ方法の概要を示します。

表 3. データのバックアップ方法

データのタイプ	バックアップ方法
静的データ	
リポジトリ	repos_copy ユーティリティーを使用し、カスタマイズしたシステム・コンポーネントの一部またはすべてを保管します。詳しくは、「システム管理ガイド」のコンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
カスタムのマップ Java クラス・ファイル (.class)	これらのファイルをシステム・バックアップに組み込むため、システム・バックアップに下記のディレクトリーがあることを確認してください。 <i>ProductDir</i> ¥DLMS
カスタムのコネクタ	システム・バックアップにディレクトリー <i>ProductDir</i> ¥connectors¥connector_name を含めます。ここで、「connector_name」はカスタム・コネクタの名前です。
カスタマイズされた始動スクリプト	始動スクリプトをカスタマイズしてある場合は、これらがシステム・バックアップに組み込まれていることを確認してください。 <i>ProductDir</i> ディレクトリーにある ICS Express 構成ファイルをシステム・バックアップに組み込みます。
ICS Express 構成ファイル (InterchangeSystem.cfg)	
動的データ	
相互参照表、失敗したイベントの表、および関係表	データベースにはデータベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。詳しくは、「システム管理ガイド」のシステム・コンポーネントのバックアップ方法の説明を参照してください。
コネクタ・イベント・アーカイブ表	これらの表を含むデータベースには、データベース・バックアップ・ユーティリティーを使用します。
ログ・ファイル	下記のディレクトリーをシステム・バックアップに組み込みます。 <i>ProductDir</i> ¥log

システムのシャットダウン

バックアップが完了したら、次の手順でシステムをシャットダウンできます。

- InterChange Server Express とその関連コンポーネントをシャットダウンします。
- データベース・サーバーをシャットダウンします。
- WebSphere MQ をシャットダウンします。

システムのシャットダウンの詳細については、「システム管理ガイド」を参照してください。

WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad は、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 から Express Plus V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動するための方法を示します。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus の製品コンポーネントをインストールします。
- 選択した新規アダプターをインストールします。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリを保存しますが、再配置はしません。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「製品のアップグレード」画面が表示されます。
2. 「製品のアップグレード」画面で、「次へ」をクリックします。

「サーバーのインストール」画面が表示されます。
3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
 - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。
 - バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない場合は、「**InterChange Server Express**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。
4. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.4 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターのそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for

JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 5 で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。

- すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「次へ」を選択します。
- すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「次へ」を選択します。
- Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「次へ」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

要確認: アダプターは、必要な数だけインストールできます。

5. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
 - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「サンプル」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可能になっています。「次へ」を選択します。
 - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない場合は、「サンプル」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。
- 「次へ」を選択します。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

6. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 7 に進みます。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 4 (12 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、20 ページの『ソフトウェア前提条件』のセクションを参照してください。
7. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示され
ます。

8. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。
 - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
 - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 11 (65 ページ) から手順を続行します。
- インストーラーは、MQ Client がインストール済みかどうかを調べる検査を実行します。MQ Client がインストールされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
- InterChange Server Express コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「**ネーム・サーバー構成**」画面が表示されます。この場合、ステップ 9 から手順を続行します。

注: このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

9. 「**ネーム・サーバー構成**」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「**次へ**」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、19 ページの『「**カスタム**」インストールの追加情報』を参照してください。
10. インストールを開始する前に、インストーラーは以下の検査を行います。
 - DB2 バージョン 8.1.5 またはバージョン 8.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - DB2 が構成済みかどうかの検査。サーバーのアップグレードまたはサーバーへの追加インストールが行われた場合、この検査は実行されません。サーバーは、初めてインストール対象として選択されます。
 - IBM JDK バージョン 1.4.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - MQ Server バージョン 5.3.06 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - 上記のいずれかの検査が失敗した場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。

注: インストーラーは、上記の項目がインストール対象として選択されている場合のみ、これらの項目について検査します。

11. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「終了 (Finish)」を選択して、GUI を終了します。

WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から WebSphere Business Integration Server Express V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express V4.4 の製品コンポーネントをインストールします。
- 選択した新規アダプターをインストールします。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリを保存しますが、再配置はしません。
- Failed Event Manager 用に以前にセットアップした役割ベースのアクセス・セキュリティ役割は保存されません (「システム・インプリメンテーション・ガイド」の説明に従って、役割ベースのアクセス・セキュリティ役割を新規に作成できます)。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「製品のアップグレード」画面が表示されます。

2. 「製品のアップグレード」画面で、「次へ」をクリックします。

「サーバーのインストール」画面が表示されます。

3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「InterChange Server Express」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。

- バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない場合は、「**InterChange Server Express**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。
- 「次へ」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

4. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.4 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターのそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要であるため、このアダプターはデフォルトで選択されています。(System Test サンプルは、ステップ 5 で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。
 - すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「次へ」を選択します。
 - すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「次へ」を選択します。
 - Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「次へ」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

5. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。
 - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「**サンプル**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。
 - バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない場合は、「**サンプル**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

注: サンプル・コンポーネントをインストールするには、InterChange Server Express および JText Adapter のインストールが必要です。そのため、サンプル・コンポーネントのインストールを選択すると、InterChange Server Express および JText Adapter は、ユーザーが前の画面でこれらのインストールを選択したかどうかにかかわらず、インストールされます。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

6. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 7 に進みます。
 - 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 4 (12 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、20 ページの『ソフトウェア前提条件』を参照してください。
7. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

8. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

9. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「次へ」を選択します。

次のいずれかの処理が実行されます。

- InterChange Server Express コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に InterChange Server Express コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。
 - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
 - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 12 (68 ページ) から手順を続行します。
- InterChange Server Express コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 11 (68 ページ) から手順を続行します。

注: このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

10. インストールを開始する前に、インストーラーは以下の検査を行います。
 - DB2 バージョン 8.1.5 またはバージョン 8.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - DB2 が構成済みかどうかの検査。サーバーのアップグレードまたはサーバーへの追加インストールが行われた場合、この検査は実行されません。サーバーは、初めてインストール対象として選択されます。
 - IBM JDK バージョン 1.4.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - MQ Server バージョン 5.3.06 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
 - 上記のいずれかの検査が失敗した場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。

注: インストーラーは、上記の項目がインストール対象として選択されている場合のみ、これらの項目について検査します。

11. 「ネーム・サーバー構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「次へ」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、19 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。
12. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「終了 (Finish)」を選択して、GUI を終了します。

WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から Express Plus V4.4 へのアップグレード

システムを静止状態にしてバックアップを作成したら、アップグレード手順を安全に開始できます。Launchpad から、WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 へのアップグレードをガイドする GUI インストーラーを起動することができます。GUI インストーラーの処理内容は次のとおりです。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 の製品コンポーネントをインストールします。
- 選択した新規アダプターをインストールします。
- 既存のデータベースを削除しません。
- 既存のリポジトリを保存しますが、再配置はしません。

- Failed Event Manager 用に以前にセットアップした役割ベースのアクセス・セキュリティ役割は保存されません (「システム・インプリメンテーション・ガイド」の説明に従って、役割ベースのアクセス・セキュリティ役割を新規に作成できます)。

注: バージョン 4.3.1 の Adapter または Collaboration Capacity Packs for WebSphere Business Integration Server Express Plus がインストールされている場合は、WebSphere Business Integration Server Express Plus 製品をアップグレードした後で、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、72 ページの『Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』および 75 ページの『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「製品のアップグレード」画面が表示されます。

2. 「製品のアップグレード」画面で、「次へ」をクリックします。

「サーバーのインストール」画面が表示されます。

3. 「サーバーのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストール済みの場合は、「**InterChange Server Express**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。
- バージョン 4.3.1 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールしていない場合は、「**InterChange Server Express**」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 の InterChange Server Express コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

「アダプターのインストール」画面が表示されます。

4. 「アダプターのインストール」画面で、バージョン 4.3.1 のアダプターをインストール済みの場合は、各インストール済みアダプターのそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可の状態になっています。さらに、Adapter for JText をまだインストールしていない場合、このアダプターは System Test サンプルを実行するときに必要なため、このアダプターはデフォルトで選

択されています。(System Test サンプルは、ステップ 5 で説明した、「サンプルのインストール」画面から選択できるサンプル・コンポーネントの一部です。) 以下のいずれかを実行します。

- すでにインストールされているアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択解除 (解除が必要な場合) して、「次へ」を選択します。
- すでにインストールされているアダプター以外にインストールするアダプターを Adapter for JText のみにする場合は、「Adapter for JText」のそばにあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、「次へ」を選択します。
- Adapter for JText およびインストール済みのアダプターに加えてその他のアダプターをインストールする場合は、「Adapter for JText」の横にあるチェック・ボックスを選択した状態のまま、追加する他のアダプターの横にあるチェック・ボックスを選択して、「次へ」を選択します。

「サンプルのインストール」画面が表示されます。

5. 「サンプルのインストール」画面で、次のいずれかを実行します。

- バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストール済みの場合は、「サンプル」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用不可になっています。「次へ」を選択します。
- バージョン 4.3.1 のサンプル・コンポーネントをインストールしていない場合は、「サンプル」という項目のそばにあるチェック・ボックスが選択され、使用可能になっています。次の 2 つの方法のうち、いずれか一方を選択して次に進むことができます。
 - 前述の項目を選択した状態で維持し、その他のインストール済みコンポーネントのアップグレード時にバージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントをインストールする。
 - チェック・ボックスを選択解除して、バージョン 4.4 のサンプル・コンポーネントがインストールされていない状態を維持する。

「次へ」を選択します。

「ソフトウェア前提条件」画面が表示されます。

6. 「ソフトウェア前提条件」画面では、インストーラーによって必要な前提条件が通知されます。以下のいずれかを実行します。

- 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件が必要ないと表示された場合は、ステップ 7 に進みます。
- 「ソフトウェア前提条件」画面に、追加の前提条件ソフトウェアが必要であると表示された場合、前提条件ソフトウェアのインストール方法の説明については、ステップ 4 (12 ページ) を、追加の前提条件ソフトウェア情報については、20 ページの『ソフトウェア前提条件』を参照してください。

7. 「ソフトウェア前提条件」の下部にある「製品のインストール」というラベルの付いたボタンを選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されず。

8. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

9. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「次へ」を選択します。

次のいずれかの処理が実行されます。

- **InterChange Server Express** コンポーネントがすでにインストールされており、アップグレードされる予定であるか、またはアップグレード時に **InterChange Server Express** コンポーネントをインストールする場合、インストーラーは、適切な前提条件ソフトウェアが存在し、正常に構成されていることを検査します。
 - 前提条件が満たされていない場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。
 - 前提条件が満たされた場合は、製品のインストールが開始します。この場合、ステップ 12 (72 ページ) から手順を続行します。
- **InterChange Server Express** コンポーネントがインストールされておらず、アップグレード時にはインストールされない予定の場合は、「ネーム・サーバー構成」画面が表示されます。この場合、ステップ 11 から手順を続行します。

注: このサーバー・マシンで使用できる物理的なプロセッサの最大数は、2 つに制限されます。詳細については、製品のライセンス条件を参照してください。

10. インストールを開始する前に、インストーラーは以下の検査を行います。

- **DB2** バージョン 8.1.5 またはバージョン 8.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
- **DB2** が構成済みかどうかの検査。サーバーのアップグレードまたはサーバーへの追加インストールが行われた場合、この検査は実行されません。サーバーは、初めてインストール対象として選択されます。
- **IBM JDK** バージョン 1.4.2 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
- **MQ Server** バージョン 5.3.06 がインストール済みかどうかの検査。サーバーはインストール対象として選択されます。
- 上記のいずれかの検査が失敗した場合は、エラー・メッセージが表示され、インストールは強制的に取り消されます。

注: インストーラーは、上記の項目がインストール対象として選択されている場合のみ、これらの項目について検査します。

11. 「ネーム・サーバー構成」画面で、**InterChange Server Express** コンポーネントをインストールした (またはインストールする予定の) コンピューターの IP アドレスを入力して、「次へ」を選択します。これにより、インストール・プロセスが開始します。ネーム・サーバーの詳細については、19 ページの『「カスタム」インストールの追加情報』を参照してください。

12. インストール・プロセスが開始すると、インストーラーは、インストール用に十分なディスク・スペースがあるかどうかを検査します。
 - 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択していくつかの機能またはサブ機能を選択解除するか、指定したドライブの不要なスペースを削除します。
 - 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。多数の通知画面が表示されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。「終了 (Finish)」を選択して、GUI を終了します。

バージョン 4.3.1 の Adapter または Collaboration Capacity Packs for WebSphere Business Integration Express Plus がインストールされている場合は、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、『Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』および 75 ページの『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード

この手順により、インストール済みの 1 つ以上のアダプターを、バージョン 4.3.1 の Adapter Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus からバージョン 4.4 にアップグレードします。アップグレード時には、追加のアダプターをインストールすることもできます。以下の条件が満たされていることを前提としています。

- WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.4 が、すでにマシンにインストールされています。
- アダプターをアップグレードするマシンに対して、ユーザーが管理者特権を持っています。
- アダプターをインストールするのと同じマシンに、WebSphere Business Integration Server Express V4.4 はインストールされていません。(Adapter Capacity Packs は、既存の WebSphere Business Integration Server Express Plus 4.4 インストールでのみ使用できます。)
- アップグレードまたはインストールするアダプターが、現在または将来にわたり InterChange Server Express と同じマシンに存在しない場合は、WebSphere MQ 5.3.0.2 CSD06 のインストールが、アダプターをアップグレードまたはインストールするのと同じマシンに存在しています。

Launchpad は、既存の Adapter Capacity Pack インストールからのアダプターのアップグレードをガイドする、GUI インストーラーの起動方法を示します。GUI インストーラーは、インストール済みのアダプターをアップグレードし、選択された場合は新規アダプターをインストールして、すべてのアダプターをサービスとして構成します。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。

2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。

2. 「**Capacity Pack のインストール**」を選択して GUI を起動し、Adapter Capacity Pack をインストールします。

「ようこそ」画面が表示されます。

3. 「ようこそ」画面で、「次へ」をクリックします。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「次へ」を選択します。

「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

5. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、「次へ」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「**キャンセル**」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「**フィーチャー (Feature)**」画面が表示されます。

6. 「**フィーチャー (Feature)**」画面には、まだインストールされていないアダプターのみが表示されます。以下のいずれかを実行します。
 - アップグレード中のアダプター以外にはアダプターをインストールしない場合は、「次へ」を選択します。
 - アップグレード中のアダプター以外にもアダプターをインストールする場合は、名前の横にあるラジオ・ボタンを選択して選択可能なアダプターのリストからアダプターを 1 つ選択し、「次へ」をクリックします。どのアダプターを選択するかの詳細については、39 ページの『インストールするアダプターの決定』のセクションを参照してください。

次のいずれかの画面が表示されます。

- InterChange Server Express がローカル・マシンにインストールされている場合は、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この場合は、ステップ 9 (74 ページ) に進んでください。
 - InterChange Server Express がリモート・マシンに存在する場合は、「サーバー IP アドレスの構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 7 に進んでください。
7. 「サーバー IP アドレスの構成」画面で、InterChange Server Express コンポーネントをインストールしたコンピューターの IP アドレスを入力します。InterChange Server Express が OS/400 マシンにインストールされている場合

は、「**InterChange Server Express は OS/400 上にあります。**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択します。次に、「次へ」を選択します。次のいずれかの画面が表示されます。

- 「**InterChange Server Express は OS/400 上にあります。**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択した場合は、「サーバー名の構成」画面が表示されます。この場合は、ステップ 8 に進んでください。
- 「**InterChange Server Express は OS/400 上にあります。**」という項目のそばにあるチェック・ボックスを選択しなかった場合は、「InterChange Server Express パスワード」画面が表示されます。この場合は、ステップ 9 に進んでください。

8. 「サーバー名の構成」画面で、次の手順を実行します。

- OS/400 マシンの InterChange Server Express インスタンスの名前を入力します。(デフォルトは QWBIDFT44 です。インスタンスに別の名前を付けた場合は、その名前を入力します。)
- ORB ポート番号を入力します。(デフォルトは 14500 です。別のポート番号を使用した場合は、その番号を入力します。)次に、「次へ」を選択します。

「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面が表示されず。

9. 「プリインストール・サマリー (Pre-installation Summary)」画面で、選択内容とインストールの場所を見直し、「次へ」をクリックします。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、インストーラーは、このアダプターのライセンスを登録するためにサーバーへ接続しようとします。メッセージ・ダイアログにより、アダプターが正常に登録されたかどうかが通知されます。登録が正常に完了しなかった場合や、InterChange Server Express に登録できるアダプターの最大数を超過していた場合は、エラー・ダイアログによって警告されます。「OK」を選択して、このダイアログを終了します。「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示され、プロセスが正常に実行されたか、または問題が検出されたことが示されます。

10. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、インストール GUI を終了します。

バージョン 4.3.1 の Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Express Plus がインストールされている場合は、これらの製品もバージョン 4.4 にアップグレードする必要があります。詳しくは、75 ページの『Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード』のセクションを参照してください。

Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 から V4.4 へのアップグレード

この手順により、バージョン 4.3.1 の Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus をバージョン 4.4 にアップグレードします。以下の条件が満たされていることを前提としています。

- Collaboration Capacity Pack for WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3.1 がマシンにすでにインストールされており、今度は V4.4 をインストールします。
- Collaboration Capacity Pack をアップグレードするマシンに対して、ユーザーが管理者特権を持っています。
- Collaboration Capacity Pack は、InterChange Server Express コンポーネントがインストールされているマシンと同じマシンにインストールします。
- InterChange Server Express コンポーネントは稼動していません。

Launchpad は、既存の Collaboration Capacity Pack インストールのアップグレードをガイドする、GUI インストーラーの起動方法を示します。Collaboration Capacity Pack GUI により、選択したコラボレーション・グループがアップグレードされ、インストール済みの内容が InterChange Server Express に配置されます。

Launchpad を呼び出して GUI インストーラーを起動するには、次の手順を実行します。

1. Launchpad の左側の列から、「**Capacity Pack のインストール**」というラベルの付いたボタンを選択します。2 つのボタンがある「Capacity Pack のインストール」画面が表示されます。
2. 「**Collaboration Capacity Pack のインストール**」ボタンを選択して GUI を起動し、Collaboration Capacity Pack をインストールします。Launchpad は、最初に、WebSphere Business Integration Server Express Plus の InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされているかどうかを検査します。次に、以下のように動作します。
 - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされていない場合は、インストールが失敗する可能性があることを警告ダイアログによって警告します。「**キャンセル**」を選択してインストールを取り消すか、または「**インストール**」を選択して、インストールを続けます。インストールの継続を選択した場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
 - InterChange Server Express コンポーネントがローカル・マシンにインストールされている場合は、「ようこそ」画面が表示されます。
3. 「ようこそ」画面で「**次へ**」を選択します。

「ソフトウェアご使用条件 (Software License Agreement)」画面が表示されます。

4. ソフトウェアご使用条件の条件を読み、「**ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)**」という項目のそばにあるラジオ・ボタンを選択して契約書の条件に同意し、「**次へ**」を選択します。

インストーラーは、このセクションの先頭に記載されている前提条件に適合しているかどうかを検査します。不適合条件がある場合は、「キャンセル」ボタンを選択してインストールを取り消すことを強制されます。すべての前提条件が適合していた場合は、「アップグレード検査 (upgrade check)」画面が表示されます。

5. 「アップグレード検査 (upgrade check)」画面で、インストール済みの Collaboration Capacity Pack をアップグレードすることを確認したら、「次へ」を選択します。

インストーラーは、インストールに十分なディスク・スペースがあることを検査します。その後、インストールは次のように進行します。

- 十分なディスク・スペースがない場合は、現状のディスク・スペースではインストールを完了できないため、「次へ」ボタンが使用不可になります。この場合は、「戻る」を選択して、指定のドライブ上の不要なスペースをいくつか削除する必要があります。
- 十分なディスク・スペースが存在する場合は、インストールおよび構成が開始されます。インストールと構成が完了すると、「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面が表示されて、プロセスが正常に終了したか、問題が発生したかが示されます。

6. 「ポストインストール・サマリー (Post-installation Summary)」画面で、「終了 (Finish)」を選択して、GUI を終了します。

新規のアップグレード・バージョンの始動

アップグレードを完了したら、以下の手順に従い、リポジトリの既存バージョンを使用して、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムを始動することができます。

1. 必要なすべてのサポート・ソフトウェアが稼働していることを確認します。サポート・ソフトウェアの内容は、次のとおりです。
 - WebSphere MQ (Queue Manager および Listener の両方が稼働中であることを確認してください)
 - データベース・サーバー
2. InterChange Server Express を始動します。このコンポーネントを始動すると、永続的ネーミング・サーバーも自動的に始動します。

InterChange Server Express の始動方法については、29 ページの『WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus の始動』を参照してください。

ProductDir ディレクトリーの InterChangeSystem.log ファイルを調べると、始動が正常であったことを確認できます。

注: システムのアップグレード後に InterChange Server Express の始動に失敗した場合は、このアップグレード手順を調べて、すべての指示に従ったかどうかを確認してください。それでも失敗の原因が不明であれば、修正したり、バックアップから復元したりする前に、IBM ソフトウェア・サポートにお問い合わせください。

アップグレードの検証

アップグレードが正常に処理されたかを検証するには、リポジトリ・スキーマが作成され、すべてのオブジェクトが正常にロードされたかどうかを確認します。System Manager が稼働しているマシンで、次の作業のいくつかを実行する必要があります。

- WebSphere MQ キューが、エラーがなく正常に作成されロードされていることを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「統計」を選択して、すべてのキューが適切な場所にあることを確認します。
- すべてのコネクタが指定のキューを正常に検索したことを検証します。System Manager の「サーバー」メニューから「システム表示」を選択して、コネクタの横のアイコンが青信号になっていること、およびコネクタの状況が「非アクティブ」であることを確認します。
- すべてのコネクタとビジネス・オブジェクトが System Manager に正常に表示されることを確認します。
- System Manager の「ツール」メニューから「Log Viewer」を選択して、ログ・ファイルのエラーをチェックします。

重要: ログ・ファイルにエラーが存在する場合は、そのエラーを解決してから、作業を継続してください。

アップグレード・バージョンのテスト

アップグレードしたシステムを開発から実動に移行する前に、IBM では、実動時のすべてのインターフェースおよびビジネス・プロセスについてテストを行うことをお勧めします。システムのテストでは、以下の項目について調べます。

- コネクタ: 各コネクタを始動して、コネクタの接続性をテストします。構成変更が行われていることを確認してください。コネクタ・ログ・ファイルでは、コネクタが指定のアプリケーションに接続できることを確認します。
- スクリプトおよびストアド・プロシージャ: スクリプトおよびストアド・プロシージャは、アップグレードされた場合のみテストする必要があります。スクリプトは、新規ディレクトリ・パス・ロケーションを含むように変更する必要があります。
- ポリュームおよびパフォーマンス: 過去にパフォーマンス測定が行われていれば、新たにパフォーマンス測定を行い、両方の結果を比較して、システムが安定していることを確認します。

アップグレード・バージョンのバックアップ

アップグレード・プロセスが完了したら、WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus システムのバックアップを作成します。60 ページの『システムのバックアップ』を参照してください。

次のステップに進む

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus へのアップグレードは完了しました。WebSphere Business Integration Server Express Plus をアップグレードした後、オプションのアダプターまたは Collaboration Capacity Pack をインストールする場合は、37 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』または 41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』を参照してください。

付録. サイレント・インストールおよびアンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus、Adapter Capacity Pack、または Collaboration Capacity Pack のインストールおよびアンインストールは、提供されている GUI を使用せずに実行できます。サイレント・インストールおよびアンインストールは、コマンド行から実行します。

サイレント・インストールでは、通常、インストーラーの実行時に手動で指定する応答は、付属のテンプレート応答ファイルに格納されます。このファイルは、その後コンポーネントをインストールする実行可能プログラムによって読み取られます。実行可能プログラムを実行する場合は、先にこの応答ファイルに必要な変更を必ず実行してください。設定可能なオプションについて記述している資料は、各ファイル内にあります。

サイレント・アンインストールでは、応答ファイルの使用が必要な場合とそうでない場合があります。

この章には、次のセクションが含まれます。

- 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール』
- 80 ページの 『WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール』
- 80 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 81 ページの 『Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール』
- 81 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール』
- 81 ページの 『Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール』

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus をサイレント・インストールするための応答ファイルは、CD ルートの Launchpad ディレクトリーに置かれており、次のように名前が付けられています。

- WebSphere Business Integration Server Express のサイレント・インストールの場合: `WBIServerExpressResponseFile.txt`
- WebSphere Business Integration Server Express Plus のサイレント・インストールの場合: `WBIServerExpressPlusResponseFile.txt`

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、7 ページの『第 3 章 必要なソフトウェア前提条件と WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。

2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/Launchpad/setupLinux.bin -silent -options <response_file_name>
```

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・アンインストール

WebSphere Business Integration Server Express または Express Plus のすべてのコンポーネントをサイレント・アンインストールするには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Business Integration Server Express のインストール環境にあるディレクトリー *ProductDir/_uninstWBIServerExp4.4* から、WebSphere Business Integration Server Express Plus のインストール環境にあるディレクトリー *ProductDir/_uninstWBIServerExpPlus4.4* に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent
```

要確認:

1. 製品をアンインストールするユーザーは、製品をインストールしたユーザーと同じでなければなりません。この 2 つの作業を同じユーザーが実行しないと、アクセス権の問題が発生することがあります。
2. *Home_directory/IBM/WebSphereServer* ディレクトリーは、場合によっては手動で削除する必要があります。

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、*adaptercp_silent.txt* で、このファイルは、CD のディレクトリー *Launchpad/AdapterCapacityPack* に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、37 ページの『第 6 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Adapter Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアから任意のディレクトリーにコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/AdapterCapacityPack/setupLinux.bin -silent -options<reponse file>
```

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`adaptercp_silent_uninst.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad/AdapterCapacityPack` に置かれています。

サイレント・アンインストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. ディレクトリー `ProductDir/_uninstAdapterCP4.4` に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストールの実行時に使用される応答ファイルの名前は、`collabcp_silent.txt` で、このファイルは、CD のディレクトリー `Launchpad/CollabCapacityPack` に置かれています。

サイレント・インストールを実行するには、以下の手順を行います。

1. 必要な前提条件やインストール・オプションを十分理解するため、41 ページの『第 7 章 WebSphere Business Integration Server Express Plus の Collaboration Capacity Pack のインストール』に説明されている前提事項や GUI によるインストール手順を熟読します。設定可能なオプションについて記述している資料は、応答ファイル内にもあります。
2. 応答ファイルを CD メディアからコピーし、インストール環境に必要な設定に合わせて変更します。
3. 変更した応答ファイルが格納されているディレクトリーに移動します。
4. 次のコマンドを発行します。

```
mount_point/CollabCapacityPack/setupxLinux.bin -silent    ¥  
-options collabcp_silent.txt
```

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストール

Collaboration Capacity Pack のサイレント・アンインストールを実行するには、次の手順を実行します。

1. ディレクトリー `ProductDir/_uninstCollabCP4.4` に移動します。
2. 次のコマンドを発行します。

```
uninstaller.bin -silent
```

特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものです。本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032

東京都港区六本木 3-2-31

*IBM World Trade Asia Corporation
Licensing*

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。

IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation

577 Airport Blvd., Suite 800

Burlingame, CA 94010

U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります。その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確認できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者にお願いします。IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります。単に目標を示しているものです。本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。著作権表示: 本書には、様々なオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。この情報をソフトコピーでご覧になっている場合は、写真やカラーの図表は表示されない場合があります。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、提供されている場合、このプログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立つことを目的としています。一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

重要: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標または登録商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
CICS
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
Lotus
IMS
Informix
iSeries
Lotus Domino
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
MVS
OS/400
Passport Advantage
SupportPac
WebSphere
z/OS

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名等はそれぞれ各社の商標です。

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus には、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) が開発したソフトウェアが組み込まれています。



WebSphere Business Integration Server Express バージョン 4.4、および WebSphere Business Integration Server Express Plus バージョン 4.4。

索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

[ア行]

アップグレード
アップグレードされたバージョンの始動 76
アップグレード・バージョンのテスト 77
既存システムの準備 59
検証 77
サポートされるアップグレード・シナリオと前提事項の特定 55
システムのシャットダウン 61
システムのバックアップ 60
システムを静止状態にする 59
失敗のチェック 76
Adapter Capacity Pack 72
Collaboration Capacity Pack 75
WebSphere Business Integration Server Express Plus V4.3 から Express Plus V4.3.1 へ 68
WebSphere Business Integration Server Express V4.3 から Express V4.3.1 へ 65
WebSphere Business Integration Server Express V4.3.1 から Express Plus V4.3.1 へ 62
アンインストール
Adapter Capacity Pack 40
Collaboration Capacity Pack 44
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 27
インストール
概要 1
Adapter Capacity Pack 37
Collaboration Capacity Pack 41
応答ファイル
Adapter Capacity Pack のサイレント・アンインストール 81
Adapter Capacity Pack のサイレント・インストール 80
Collaboration Capacity Pack のサイレント・インストール 81
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のサイレント・インストール 79

[カ行]

「カスタム」インストール 17
管理
InterChange Server Express 30
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 29
起動
Launchpad 4
「クイック・スタート・ガイド」、表示 35

[サ行]

再始動, InterChange Server Express の 32
サイレント
Adapter Capacity Pack のアンインストール 81
Adapter Capacity Pack のインストール 80
Collaboration Capacity Pack のアンインストール 81
Collaboration Capacity Pack のインストール 81
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のアンインストール 80
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 79
始動
InterChange Server Express 29
System Manager 30
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus 29

[タ行]

次のステップに進む
システムのアップグレード 35
ソフトウェア前提条件の検査およびインストール 6
Adapter Capacity Pack のインストール 35, 78
Collaboration Capacity Pack のインストール 35, 40, 78
Launchpad の基本機能の学習 2
WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus インストールの検証 32

次のステップに進む (続き)

WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus の始動 28
登録, InterChange Server Express の 30

[ハ行]

パスワード, InterChange Server Express, 変更 31
表記上の規則 v
「標準」インストール 10

A

Adapter Capacity Pack
アップグレード 72
サイレント・アンインストール 81
サイレント・インストール 80
GUI を使用したアンインストール 40
GUI を使用したインストール 37

C

Capacity Pack
アダプター 37
コラボレーション 41
Collaboration Capacity Pack
アップグレード 75
サイレント・アンインストール 81
サイレント・インストール 81
GUI を使用したアンインストール 44
GUI を使用したインストール 41

D

DB2
最小基準 21

F

Failed Event Manager
手動構成による Tomcat の使用 52
ディレクトリーのロケーション 27
Web サーバー使用時の構成 48, 49
First Steps の起動 23

WebSphere Business Integration Server
Express および Express Plus のインストールの検証 35

I

- InterChange Server Express
 - 管理 30
 - 再始動 32
 - 始動 29
 - 登録 30
 - パスワードの変更 31
 - System Manager への接続 31

L

- Launchpad
 - 「クイック・スタート・ガイド」の表示 35
 - Adapter Capacity Pack のインストール 37
 - Collaboration Capacity Pack のインストール 41
 - WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus のインストール 10

S

- System Manager
 - 始動 30
 - InterChange Server Express への接続 31
- System Monitor
 - 手動構成による Tomcat の使用 51
 - ディレクトリーのロケーション 27
 - Web サーバー使用時の構成 48, 49
 - Web サーバー不使用時の構成 50

W

- Web Deployment
 - ディレクトリーのロケーション 27
 - Web サーバー使用時の構成 48, 49
- Web ベース・ツール
 - System Monitor、Failed Event Manager、Web Deployment の構成 48, 49
- WebSphere Business Integration Server Express および Express Plus
 - アップグレード 55
 - インストールの検証 35
 - 管理 29
 - サイレント・アンインストール 80
 - サイレント・インストール 79
 - 始動 29
 - ディレクトリー構造 25
 - GUI を使用したアンインストール 27



Printed in Japan